IS 銀の姫とサーヴァント

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　銀の姫とサーヴァント

【Ｎコード】
Ｎ２５０８Ｚ

【作者名】
黒翼

【あらすじ】
銀の姫は幼き頃の白き騎士に救われた。
だが、無常にも別れが訪れてしまった。
そして、かつてとは変わり果てた世界で再開する。
※設定が甘かったり、チートだったりします。
そして、サーヴァントたちはＦａｔｅとは違う性格だったりします。
それらが嫌な方はバックで。

プロローグ（前書き）

また始めてしまった……。

プロローグ

それはずっと昔のことだった。

「一緒に遊ぼうよ！」

「え？」

私は元々髪の色は違い、ブラウンだった。
しかし、あるとき突然髪の色が変色し、銀髪になってしまった。
その所為か、一緒に遊んでいた子達が奇妙がって私から離れていった。
だから、私は一人でいた。
そんな私に声を掛けてくれてのが彼だった。

「君も一緒に遊ぼうよ！」

「え、でも……」

「遊ぼう、ね？」

そんな私に明るい笑顔で話しかけてくれた。
私は嬉しかった。

「う、うん！」

一人だった私に、寂しかった私に声を掛けてくれた、彼が好きだった。

でも、私の両親は、あまりにも過保護だった。
幼稚園でこれだ、小学校ではもっと酷いかもしれない。
そういう考えを持ってしまったいたが故に、私と海外に移住することになった。
実家のあるドイツに行くことになってしまったのだ。

「一君……」

「ウリアちゃん、また会おうね！」

「う、うん、また……。　私のこと、忘れないでね……？」

「もちろん！　絶対に忘れない！」

「またね、一君。　お姉さんにも言っておいてね」

「うん！」

これが、私と彼の別れだった。

『世界で唯一のＩＳ操縦者・織斑一夏』

実家の城（誤字在らず）でテレビを見ていて、私『ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』は呆然とした。
祖父の命令でＩＳ学園に行くことが決まっていた私は運命を感じた。
彼の姉は一年ほどドイツ軍に来ていたため、再開したときは驚かれた。
彼女は私の立場に驚いた。
私は、ドイツのみならず、様々な国に大きなの権力を持つアインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの企業の企業代表操縦者になっていた。
元々、アインツベルンは貴族だった。
それ以外に、錬金術が使える。
私も使えるが、流石に治癒まではすることができない。

「一君、覚えているかな……」

『彼がウリアスフィールの言っていた人ですか』

「うん。　私の恩人で、私の初恋の相手。　今もそれは続いているんだけどね」

『写真で見る感じはいい男だな』

「幼稚園のころは凄く優しくて、明るい人だったよ」

『それは今でも変わらぬといいがな』

「きっと一君は今でもいい人だよ」

『そうであると願いましょう』

「うん。　早く会いたいな……」

私は、早くＩＳ学園に入学したい、早く一君に会いたい、そういった欲求が生まれてきた。

再開

「全員揃ってますねー。　それじゃあＳＨＲを始めますよー」

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持っている。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

誰も答えません。

原因は、ここにいる唯一の男性で、私の初恋の相手の織斑一夏。

唯一の男性であるが故に、クラスの視線は全て彼に向けられている。

私も見ているんですけどね、だって一君とっても格好よくなってるんだもの。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。　えっと、出席番号順で」

あ、私ですね。

「ウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。　よろしくお願いします」

私に気づいてくれるかな？

一君は今この空気に飲まれちゃってるから気づかないかな？

後で話しかければいいか

Ｓｉｄｅ～一夏～

キツイ、これは想像以上にキツイ！
男が俺だけってこれだけ視線を集めるものだな。

「……くん。　織斑一夏君っ」

「は、はいっ！？」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。
案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。　お、怒ってる？　怒ってるかな？　ゴメンね、ゴメンね！　でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。　だからね、ご、ゴメンね？　自己紹介してくれるかな？　だ、駄目かな？」

山田先生はぺこぺこと頭を下げる。
この人、本当に先生なのだろうか？

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？　本当ですね？　や、約束ですよ。　絶対ですよ！」

俺の手をとり詰め寄る先生。
凄い注目されるんですけど……。
うわ、すっげー視線。

「えー……えっと、織斑一夏です。　よろしくお願いします」

『もっと喋ってよ』と言う空気が流れている。
だが、話すことが何も無い。
……しばらく考えたが何も無い。
助けを求めて幼馴染の箒を見るが、目をそらされた。
あ、あれ？
あの子、もしかして……。
いや、まさかな。
っと自己紹介の最中だったな。

「……以上です」

女子数名がずっこけるが、俺にとってはどうでもいい。
彼女があの子なのかが気になって仕方が無い。
む！　殺気！

パシッ！

この攻撃の鋭さ、間違いない！

「ほう、防ぐか」

黒スーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を思わせる鋭いつり目。
間違いない。
俺の実姉なのだが、職業不詳で月一、二回しか家に帰ってこないのだ。
だけどなんでここに？

「……やっぱり千冬姉だったか」

パシッ！

「織斑先生と呼べ。　馬鹿者」

もう一度出席簿が振り下ろされるが、それをも防ぐ。
俺だって鍛えているんだ、それがこんなところで役立つとは。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。　副担任としてこれくらいはしないと……」

山田先生は若干熱っぽくなった。
そっちの気があるわけではないよな？

「諸君、私が織斑千冬だ。　これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。　私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。　理解出来ない者は出来るまで指導してやる。　私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。　逆らっても良いが、私の言う事は聞け、いいな」

なんという暴力発言。
教師有るまじき発言だと思うぞ、我が実姉織斑千冬よ。
……何のキャラだ、コレ？

「キャーーーーーー！　千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」
「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！　北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて、嬉しいです！」
「私、お姉様の為なら死ねます！」

キャアキャア騒ぐ女子達を、千冬姉はうっとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。　感心させられる。　それとも何か？　私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

人気は買えないんだから、もうちょっと優しくしようぜ？

「きゃあああああっ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして～！」

このクラスは変態さんが多いのか？
ノーマルだよな？　ノーマルもいるといってくれ！

「で？　おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は――――」

パシッ！
本日3度目。
俺、止めてなかったらもう脳細胞が一万五千個死んでるぞ？

「織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

俺と千冬姉が姉弟なのがばれた。

「え……？　織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『ＩＳ』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなぁっ。　代わってほしいなぁっ」

最後のは放っておこう。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。　諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。　その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。　いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「席に着け、馬鹿者」

馬鹿で結構。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～ウリア～

一夏、強くなってるみたい。
あの千冬さんの攻撃をああも防ぐなんて。
＞ますます惚れましたか？＜
＞うん。　写真で見るよりもずっと格好いいしね＜
＞その恋が実るといいな＜
＞うん。　覚えているかな？＜
あ、彼らはアインツベルンが創った私の専用機『サーヴァント』の人格たち。
アインツベルンが過去に召喚した英霊たちらしい。
神話に出てきた英霊たちの力を貸してもらうことができるのが、私のＩＳの強みなんだ。
キーンコーンカーンコーン。
あ、一時間目が終わった。
一君はダウンしていた。
大丈夫かな？
＞主よ、話しかけなくてもいいのか？＜
＞あ、そうだった＜
私は席を立ち、一君の席に行く。

「ちょっといいかな？」
私以外にもう一人、一君に話しかけようとしていた子がいたけど、
私は確かめずにはいられない。
「はい？　……！（ガタッ！）」
一君は私を見ると驚いて席を立った。
周りは何事かと見てるけど、気にしない。
「覚えてる……かな？」
「ウリア、なのか……？」
「うん。　久しぶりだね、一君」
「本当に、ウリア……なんだな？」
「そうだよ。　幼稚園のころに別れた、ウリアスフィール・フォン・
アインツベルンだよ」
「久しぶり、ウリア。　俺、ずっと覚えていたぞ。　ウリアと別れ
てから十年間、ずっと」
「うん……私もずっと忘れなかった……」
よかった、一君が私のことを覚えていてくれて……。
涙が出てきたよ。
「お、おい、どうした？」

「嬉しくて涙が……」

「そんなに嬉しいのか？　俺も嬉しいけど……」

だって私の好きな人なんだんもん！

覚えてもらえてて嬉しくないわけないでしょ！

＞おめでとうございます、ウリアスフィール＜

＞まだ早いぞ、アルトリアよ。　それはウリアの恋が実ってから言うべき台詞だとは思わないかね？＜

＞ほう、わかっているではないか＜

＞イスカンダル、私は鈍感であったが、それは過去の話だぞ。　それに、流石にそれくらいは俺でもわかる＜

＞一番新しい英霊が言うではないか＜

＞無駄な言い争いをするな。　我らは主に仕えるだけであろう＜

＞間違っているぞ、ディルムッドよ。　余は仕えてはおらぬ。　この契約は余たちの気分次第だ＜

＞イスカンダルの言うとおりだ。　現にギルガメッシュは現界しているが、力を貸すことは滅多にない＜

＞そういえばそうだったな＜

このＩＳに宿る英霊たちの中で最も強い力を持つギルガメッシュは、滅多なことがない（ていうか、二回くらいしか使ったことが無い）と力を貸してくれないから困る。
『我（オレ）の宝物をそう簡単に使おうとは片腹痛い』とか言うから、ギルガメッシュはほとんど使えず仕舞い。
人類最古の英雄王はいつになったら私にちゃんと力を貸してくれるのだろうか？

「これからもよろしくね、一君」

「ああ、よろしく。　あと、一夏でいいぞ」

「今はまだ一君のほうがいいからこのまま」

「そうか」

キーンコーンカーンコーン。

「時間みたいだから、また次の時間にね」

「おう」

私と一君の繋がりが切れて無くてよかった～。

再開（後書き）

「出した英霊たちは、なんとなくです。
後、原作読んでないから英霊たちの口調がわからない！」

「そんなので大丈夫なんでしょうか？」

「問題ないと信じている！」

「こんな駄作者ですが、応援してあげてくださいね」

「ウリアぁ！？」

設定（12月17日更新）（前書き）

一応投稿します。
が、設定が甘いです。
（誕生日を追加しました）

設定（12月17日更新）

【名前】
ウリアスフィール・フォン・アインツベルン

【見た目】
Ｆａｔｅのアイリとイリヤを足して二で割ったような感じ。
元々はブラウンの髪に赤い目だが、なぜか急に銀（白？）髪に変わった。

【設定】
幼稚園時代は日本にいたが、突然の髪色変化により起きた周囲の反応と、あまりにも過保護すぎた両親の所為でドイツに移住した。
アインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの持つ企業の企業代表でもある。
アインツベルンの秘奥である錬金術を覚えているが、治療術はまだできない。
一夏のことがずっと好きで、一途である。
誕生日は6月15日である。

【専用機名】
サーヴァント

【設定】
アインツベルンが創り上げたＩＳ。
アインツベルンが呼び出した英雄たちの霊『英霊』たちが宿り、その英霊の気分次第で力を貸すという、変わった性質を持つ変わったＩＳ。
元々のカラーは雪のような白で、英霊の使用した武器『宝具』も使

えるが、真の力は使えない。
『宝具』の真の力を使うのは簡単で、英霊とＩＳを共有するすること（共有時はＩＳの格好が変化する）。
ただし、その英霊が拒めば使えない。
しかし、その中にもいろいろと例外が存在したりする。

【織斑一夏について】
一夏の戦闘能力は高く、剣道にて、箒では相手にならないほどに強い。

宣戦布告（前書き）

最後を一部修正しました。

宣戦布告

（一君、どうしたのでしょうか？）

二時間目。
一君が挙動不審でいた。

＞内容がわからないのでは？＜

（あ、それかも）

＞恐らくＩＳの勉強をし始めたのは長くても一ヶ月前。　十分頷ける＜

＞何かしらのアクシデントがあるかもしれない＜

（それだね。　何かの手違いがあって捨ててしまったのかもしれませんし）

＞まあ、今は見届けるべきであろう＜

（うん）

私は一夏を見守ることにした。

「先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません」

え？

「え……。　ぜ、全部ですか……？」

一君、本当に何してたんですか？

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

誰も手を上げない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

今度は防がない一君。

自分が悪いのは自覚しているようだ。

それにしても、本当に捨ててしまったとは……。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。　あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。　いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。　やります」

よし、教えよう。
私は一君のためならなんでもするつもりだし、そもそも他の子なんかに一君を渡してたまるものですか。

☆

「一君、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。　さっぱりわかんねえ」

「それは仕方ないよ。　だってここに来る子はちゃんと勉強してきてるんだし、ＩＳに全く関係の無かったんだから、それはこれから挽回しよ？　私も手伝うから、ね？」

あれ？
一君に目を逸らされちゃいました。

「あ、ああ。　よろしく頼むよ」

「……ちょっと「ちょっとよろしくて？」……」

「へ？」

「はい？」

声を掛けてきたのは黒髪ポニーテールの子と、金髪ロールの子。
全く、一君と私の時間を邪魔しないでください。

「訊いてます？　お返事は？」

「あ、ああ。　訊いているけど……どういう用件だ？」

「まあ！　なんですの、そのお返事。　わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

「悪いな。　俺、君が誰か知らないし」

「私もです」

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

そこまで無知でしたか……。
周りの子達がずっこけてますよ。

「一君、代表候補生と言うのは国家代表ＩＳ操縦者の候補生のことだよ。　単語からもわかるよ」

「そう！　つまりエリートなのですわ！」

一君に指を指さないでください。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。　それはラッキーだ」

「……馬鹿にしてますの？」

あなたが幸運って言ったんじゃないですか。

私と一君が再会できたことのほうが幸運です。

「大体、あなたＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。　唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわ」

「俺に期待されても困るんだが」

「一君のことを知らない人が評価をしないでください。　そんな下らない価値観を持っているから世界が歪むんです」

「なんですって？」

「貴女が偶々学年主席で、イギリスの代表候補生なだけで一君を下に見ないでください。　貴女よりも一君のほうがよっぽどか世間に

誇れます」

「貴女、私を侮辱するんですの？」

「貴女が先に一君を侮辱したんじゃないですか。　私は一君を知らないのに侮辱する貴女が嫌いです。　これなら入試を受けておくべきでした……」

「貴女、今なんと？」

「入試を受けておけばよかったといっているんです。　私が主席であれば、貴女を罵ってもいいですよね？　貴女が一君を罵ったようにね」

「貴女、入試を受けなかったんですの！？」

「はい。　御爺様曰く、やるだけ無駄と」

次期当主たるもの、代表候補生に負けてはいけないんです。

「あ、そういえば一君、入試はどうでした？」

「あーあれか？　ＩＳを動かす奴だろ？」

「そうですよ」

「あれ、俺も倒したぞ」

「へぇ、流石ですね」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」
「女子ではってオチじゃないのか？」
「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」
「いや、知らないけどそうだろ。　俺も一応倒したし」
「自信過剰ですね。　滑稽です」
「一応ってどういうことですの！？」
キーンコーンカーンコーン。
「っ……！　またあとで来ますわ！　よくって！？」
よくありません。
あ、そういえば黒髪ポニーテールはどうしたのでしょうか？
まぁ、気にしなくても大丈夫でしょう。
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
一、二時間目とは違い山田先生ではなく織斑先生の授業のようです。
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
織斑先生が思い出したように言いました。
私は遠慮しておきましょう。

「クラス代表とはそのままの意味だ。　対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。　ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。　今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。　一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。　織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？　自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺！？」

私も一君で賛成です。
私は出るわけには行きませんしね。
一君がクラス代表になれば、鍛えると言って一緒に入れますし。

「織斑。　席に着け、邪魔だ。　さて、他にいないのか？　いないなら締め切るぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！　俺はそんなのやらな――――」

「自薦他薦は問わないといった。　他薦されたものに拒否権などない。　選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも――――」

バンッ！

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

……また貴女ですか。

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルセットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。　それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

……。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

貴女がトップ、ね……。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。　世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「ただの古いだけの国に何があるんですか？」

一君が怒るのはわかります。
ですが、私も我慢なりません。

「あっ、あっ、あなたがた！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に日本を侮辱したのは貴女ですよ。　私はこの国が好きなんです。　ましてや、一君の侮辱をもする貴女は気に入らない」

「あ、あなた、一度までならず二度までも……！」

「そもそも、日本で暮らすのが苦痛ならば国に帰ればいいではないですか。　誰も貴女を止めませんよ？」

「け、決闘ですわ！」

「いいでしょう。　貴女のその自信、粉々にしてあげます」

＞ウリアスフィールが怒っています……＜

＞ほう、面白そうだな＜

＞ギルガメッシュ！？＜

＞ここまで切れたのは中々無いではないか。　あの雑種がどのようにしてウリアにやられるか、見物ではないか＜

＞あそこまで怒っているのは初めてではあるが……＜

＞あのウリアが怒っているのだぞ？　これ以上ない余興ではないか＜
英霊たちが何か言ってますね。
「さて、ハンデはどれほど付けましょうか？」
「貴女、私をどれだけ下に見れば……！」
「オルコット、悪いことは言わん。　ハンデを付けてもらえ。　お前では確実に負けるぞ。　あいつはあのアインツベルンの次期当主だぞ」
「な！？」
アインツベルンは何かしらで秀でていないとならない。
私は頑張ってあらゆることを覚えましたからね。
御爺様曰く、歴代最強になれるとのこと。
「先生、勝手にばらさないでくださいよ。　まあ、いいです。　この際言っておきましょう。　アインツベルン家次期当主兼企業代表のウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。　以後、お見知りおきを」
「では、勝負は一週間後の月曜。　放課後、第三アリーナで行う。
アインツベルンとオルコット、その後、その勝者と織斑の試合だ。
それぞれ準備をしておくように」
「俺もなのか！？」
「アインツベルンはそもそも立候補も推薦もされていない。　これ

がクラス代表を決めるものだと忘れるな。　では、授業を始める」

（どうやってあの子を潰しましょうか……、強すぎる宝具ではあっけないですし……）

＞では、私ならどうかね？＜

（シロウ？　あ、そうですね。　投影と『壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）』ならじわじわとやれますね）

＞そういうことだ。　私なら君の要望を果たせると思うがどうかね？＜

（そうですね。　あの子にはシロウの力を使わせてもらいますね）

さて、試合については考えたので、一君を助けましょう。

宣戦布告（後書き）

「ウリアは一夏のことになると人格が変わります」

「一君を侮辱するなら、それが誰であろうと許しません……」

「わぁー黒いオーラが見えるよー」

同居

Ｓｉｄｅ～一夏～

放課後、俺は机の上でぐったりとしていた。
ウリアに教えてもらおうとしたけど、用があるみたいで駄目だった。
にしても、ここにウリアがいるなんて未だに信じられないな。
昔も可愛かったけど、もっと可愛くなってたし……って何考えてるんだ、俺は！？

「ああ、織斑君。　まだ教室にいたんですね。　よかったです」

「は、はい？」

いかんいかん。
あと少し遅かったらもっと酷く動揺しただろう。

「えっとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋って決まってないんじゃなかったですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。　政府特例もあって、とにかく寮に入れることを最優先にしたみたいです。　一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。　でも、一回家に帰らないと荷物を準備できないので、もう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら――――」

「私が手配しておいてやった。　ありがたく思え」

あー千冬姉か。
どうせ生活必需品しか持って来てないだろうな。
やっぱ一回帰らないと駄目だな。

「生活必需品と、一応あれも持ってきておいたぞ」

「本当か？　千冬姉！」

パシッ！

「織斑先生と呼べ」

危ない危ない。
危うく喰らうところだった。

「ありがとうございます。　これで帰らなくて済む……」

あれとは、まあ木刀と真剣とかなんだが、俺が鍛えるときに使っているものだ。
あれがないとやり辛いんだよな。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。　夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。　ちなみに各部屋には

シャワーもありますけど、大浴場もあります。　学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

俺、風呂大好きなんだが……。

「あほかお前は。　まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

なるほど、そういえば俺しか男いないんだった。

「おっ、織斑君っ、女子とお風呂はいりたいんですか！？　だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

ウリアとだったら……って、何考えてるんだよ、俺は！

「ええっ？　女の子に興味が無いんですか！？　そ、それはそれで問題のような……」

「ようなじゃなくて普通に問題です。　それと、俺はノーマルです。同性愛者ではありません」

俺はずっとウリアが好きなんだよ。

それもあったから、ずっと覚えていれたんだ。

「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。　織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。　道草くっちゃだめですよ」

確か、校舎から寮まで５０メートルくらいしかなかったはずだ。どうやれば道草をくえるんだ？

「さて、部屋に行こう……」

この女子たちの針の筵から開放されるなら、まだ部屋で他の女子一人のほうがまだマシだ、多分。

☆

「１０２５……ここだな」

俺は鍵を差し込む。

あれ、開いてる？

部屋に入ると大きめのベッドが二つ並んでおり、まるでホテルの一室みたいだった。

とりあえず荷物を床に置いて、ベッドにダイブする。

すっげぇもふもふしてる。

「誰かいるんですか？」

奥のほうから声が聞こえた。

「あ、同室になった人ですか。　こんな格好ですみません。　私は――――」

「――――ウリア」

シャワー室から出てきたのは十年ぶりに再会した白銀の美少女、ウリアだった。
そのウリアの格好は、バスタオルを一枚巻いただけであった。
白銀の髪に白い肌が映え、とても綺麗に見えた。

「……え？」

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「……え？」

私がシャワーを浴びて出ると、一君がいた。

「い、い、一君……？」

「お、おう」

私の今の格好を思い出す。
シャワーを浴びた分で、バスタオルを一枚巻いただけ。

「きゃっ！」

「わ、悪い！」

咄嗟に手で胸元を隠してうずくまる。
一君は後ろを向いてくれた。

「な、何で一君がこの部屋に……？」

「な、なんかここが俺の部屋みたいでな」

「そ、そうなの……？」

「こ、これがその紙」

一君が顔を背けたまま紙を見せてくれる。
紙には１０２５と書いてあった。

「……本当みたい……」

「お、俺はどうすればいい？」

「そ、そのままでお願い！」

「わ、わかった！」

私は急いでシャワー室に入り、手早く着替える。

「み、見られちゃった……。　まだ心臓バクバクだよぉ……」

いくら好きな人と言えど、全く予想してなかったのでビックリしてしまった。

「ふぅ……よしっ！」

私は深呼吸をしてからシャワー室を出る。

「もういいよ」

「お、おう」

「え、えっと、その……」

何を話したらいいのかな……。

「久しぶり、ウリア」

「あ、うん、久しぶり。　十年ぶりだね」

「今まで何してたんだ？」

「ドイツの方の学校に行ってたんだ。　実家を継ぐためにもいろいろやってたよ」

「へぇ、そうなんだ」

「一君は？」

「俺はひたすらに鍛えていたな」

「みたいだね。　千冬さんの攻撃を何度も防いでいたからわかったよ」
普通避けるのも防ぐのも無理だと思うんだよね。
「そういえば一君、あの黒髪ポニーテールの女の子と知り合い？」
「もしかして箒のことか？」
「箒？」
「篠ノ之箒って言って、小学校のときに知り合ったんだ」
「篠ノ之？　篠ノ之ってあの篠ノ之？」
「そうだぜ。　箒は篠ノ之束さんの妹なんだ」
「あの人の妹ですか」
「知ってるのか？」
「なんどか実家に来たことがあるんです」
「マジかよ。　あの人、今どこにいるかわからないんだよな」
ＩＳを開発した篠ノ之束博士は現在行方不明なんですけど、なぜか実家に来るんですよね。
ふと気づいたら侵入されたこともありますし。

「あ、あの……一君」

「ん？　なんだ？」

「一君って、付き合ってる人か、好きな人っていますか？」

ずっと気になっていたんです。

「ぶっ！　い、いきなり何を言うんだ！？」

「気になったんです！　十年の間にそういう子がいてもおかしくないですし……」

「……付き合ってる子はいないけど、好きな子ならいるよ」

「！　そう、ですか……」

やっぱりいたんですか……。

ちょっと残念です……。

でも、その分頑張らないと！

「きゃっ！　い、一君？」

一君に抱き寄せられました。

な、ななんで！？

「俺が好きなのはお前だよ、ウリア」

「……え？　今、なんて……？」

「俺が好きなのはお前なんだ。　ウリアと別れてからの十年間、ずっとお前のことが好きだった」

一君は私のことが、好き？
十年前からずっと？

「お、おい、どうしたんだ？　もしかして、嫌だったか？　そうだよな、好きでもない男に抱き寄せられたら泣きたくもなるよな……」

私の目からは自然と涙が溢れてきていた。

「ち、違うよ、一君。　嬉しいんだよ」

「う、嬉しい？」

「私も、ずっと一君のことが好きだったんだ。　そしたら一君が……」

「そうか……、よかったぁ。　嫌われたんじゃないかって思って冷や冷やしたぜ」

「でも、私でいいの？　十年ぶりなんだよ？」

「当たり前だ。　そういうウリアだって十年ぶりじゃないか。　本当に俺なんかでいいのか？」

「一君は私の恩人なんだよ？　一人ぼっちだった私を救ってくれたんだよ？　忘れたくても忘れられないよ」

「そうか。　あの時はそんなつもりなかったんだけどな」

「一君にそんな気がなくても、私にとってはとっても嬉しかったことなんだよ。　だから今までずっと好きだったんだよ」

「そうだったのか。　ありがとう、俺なんかをずっと好きでいてくれて。　そして、これからよろしくな、ウリア」

「うん、よろしく。　一君……いや、一夏」

一夏って呼ぶときは思いが伝わったときって決めてたんだ。

「ねぇ、一夏」

「どうしむぅ！」

私は一夏にキスをする。

「私のファーストキスだよ」

「俺もだ」

＞＞＞おめでとう（ございます）、ウリア（スフィール）＜＜＜

英霊たちも祝ってくれた。

今日はいい日だよ。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

同居（後書き）

「一夏とウリア、あっさりとくっつけちゃいました」

「一夏と恋人、えへへ……」

「若干ウリアが壊れましたね」

勉強（前書き）

前話の『宣戦布告』の最後を修正しました。

勉強

Ｓｉｄｅ～ウリア～

晴れて一夏と恋人同士になれた次の日。
朝の食堂で一緒に朝食を取っている。

「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」
「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」
「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。　やっぱり彼も強いのかな？」

やっぱりここでは男である一夏は目立ちますね。
こそこそと話の話題にされてます。

「一夏、隣いいか？」

「ウリア、別にいいよな？」

一夏が私を気遣ってくれるのは嬉しいですね。
篠ノ之さんはムッとしてましたけど。

「構いませんよ」

「……では、失礼する」

ムッとしたまま篠ノ之さんは席に着く。

「……一夏、この女は誰だ？　やけに親しそうだが……」

あ、もしかしてこの子、一夏に惚れているんでしょうか？

「ウリアか？　前に言ったのを覚えてないか？　幼稚園のときに別れた初恋の人だって」

一夏、私のことを言ってたりしてたんですね。

「ウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。　よろしくおねがいしますね、篠ノ之箒さん」

「なぜ名前を？」

「一夏に覚えてもらいました」

「そうか。　篠ノ之箒だ。　こちらこそよろしく」

手を出されたので握手をします。

「一夏、食べ終わったら昨日の続きをしますよ」

「おう。　わかった」

今は一夏の勉強が重要ですからね。

「ウリアスフィールよ」

「なんですか？」

「昨日の続きとはどういうことだ？」

「ＩＳの勉強についてです。　一夏、ＩＳに関しては無知ですから、教えておかないといけませんからね」

「そういうことか」

しゃべりながらも手は止めてません。
一夏の勉強には少しでも時間が欲しいですからね。

「ウリア、俺は終わったぞ」

「あ、少し待ってください。　すぐに食べますから」

一夏のほうが早く食べ終わってしまいました。
私のほうが量は少ないのに。
しゃべりすぎましたね。

「ごちそうさまでした。　では、行きますか、一夏」

「ああ。　じゃ、またな、箒」

「あ、ああ」

私と一夏は並んで教室に向かい、そのまま時間になるまで勉強をしました。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～一夏～

ウリアがわかりやすく教えてくれたおかげで、大分授業についていけるようになった。
たった一日でここまで覚えれるとは、ウリアにちゃんとお礼しないとな。

「織斑、お前のＩＳだが準備までに時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。　だから、少し待て。　学園で専用機を用意するそうだ」

「マジですか？」

「事実だ」

ウリアの勉強のおかげで、専用機の重要性を覚えたため、俺は驚いた。

・ＩＳのコアは全部で４６７しかなく、それら全ては束さんが作ったものであり、しかもブラックボックス化されてあるため、そのため束さんしか作れない。
・国とか組織では振り分けられたコアで研究とかを行っている。
・コアはアラスカ条約により取引が禁止されている。

こんな感じ。

「本来なら専用機は国家あるいは企業に属する人間しか与えられない。　が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的とし

て専用機が用意されることになった」
「つまり、俺はモルモットってことか」
「悪く言えばな」
専用機か、どんな機体なんだろうか？
「あの、先生。　篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
女子の一人がこの空気の中でおずおずと千冬姉に質問した。
……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしいつかはバレるよな。
「そうだ。　篠ノ之はアイツの妹だ」
千冬姉、教師が個人情報をばらしてどうするんだ。
「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内が二人もいる！」
「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」
「篠ノ之さんも天才だったりする！？　今度ＩＳの操縦教えてよっ」
授業中だというに箒の元に女子が群がる。
傍から見れば面白い光景だな。
「あの人は関係ない！」
突然の大声。

「……大声を出してすまない。　だが、私はあの人じゃない。　教えられるようなことは何も無い」

あれ？
箒って束さんのこと嫌いだっけ？

「さて、授業を始めるぞ。　山田先生、号令」

「は、はいっ！」

ま、いっか。
今はＩＳだ、ＩＳ。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「安心しましたわ。　まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

お昼休み、また来ましたよ、イギリスの代表候補生。

「一夏とやるには私を倒さないといけないの、覚えてないの？　あなたじゃあ私には勝てない」

代表候補生が相手なら、絶対に負けない。
サーヴァントを使えば何人でも大丈夫。

量産機だとしても、十人くらいなら同時に戦っても勝てる。
現に、国家代表三人と同じ機体で戦って勝ちましたからね。
あれは危なかったですけど。

「さて、一夏行きましょう。　勉強の時間が減ってしまいます」

「おう、そうだな」

「お待ちなさい！」

「なんですか？　一夏との時間を邪魔しないでください」

「さて、ウリア行こうぜ。　勉強の時間が惜しいんだ」

「あ、はい」

もう一夏もあの子のことを無視するようです。
掴まるだけ時間の無駄ですしね。
それに、食堂も混んでしまいます。
急ぎましょう。

はい到着。
やっぱり混んでますね。
でも、あのまま掴まっていればもっと混んでいたでしょう。

「私は席を取っておくので、料理のほうはお任せします」

「わかった。　何でもいいか？」

「はい。　一夏と同じもので構いません」
席がなくなる前に確保しておかないと。
あ、ありました。
しばらくすると、一夏が来ました。
「はい。　鯖の塩焼き定食だって」
「ありがとう、一夏」
「おう。　これくらいお安い御用だ」
「ねえ。　君って噂の子でしょ？」
三年生の女子生徒が話しかけてきた。
「はあ、たぶん」
「代表候補生の子か企業代表の子と勝負するって聞いたんだけど、ほんと？」
「はい、そうですけど」
あ、一夏の隣の席にかけた。
む、この人、私の一夏に色仕掛けでもする気？
「でも君、素人だよね？　ＩＳ稼働時間いくつくらい？」
「いくつって……二十分くらいだと思いますけど」

「それじゃあ無理よ。　ＩＳって稼働時間がものをいうの。　相手って代表候補生か企業代表なんでしょ？　だったら軽く三百時間はやってるわよ」

私は五百時間はやってますね。

「でさ、私が教えてあげよっか？　ＩＳについて」

「結構です。　俺にはウリアがいますから」

「そうです。　一夏には私が教えますから」

「でもあなたも一年生でしょ？　私のほうが上手く教えられると思うなぁ」

「大丈夫です。　私はこう見えても企業代表ですので、知識も技量も問題ありません」

「え？　あなた、自分と戦うかもしれない相手に教えているって言うの？」

「それがなにか？　たかがこれくらいのことが問題でもあるんですか？」

同じクラスなのに、助け合わないでどうするんですか。

そもそも、自分の恋人の手助けをしないわけが無いじゃないですか。

「ですので、結構です」

「そ、そう……」

打ちひしがれて去って行く三年生。
一夏は絶対に渡しません。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

ウリア対セシリア（前書き）

そういえば、箒が空気ですね。

ウリア対セシリア

Ｓｉｄｅ～ウリア～

月曜日。
イギリスの代表候補生との対決の日。

（シロウ、準備はいいですか？）

＞大丈夫だ。　君のほうこそ大丈夫なのかね？＜

（問題ありません。　後は戦うだけです）

＞では、行くとしよう＜

（ええ）

「では、私は行きますね。　一夏は白式の一次移行は終えておいてくださいね。　それと、私の戦いをよく見ておいてください。　見るだけでも勉強になりますから」

「わかった。　絶対に勝てよ」

「もちろんです。　代表候補生に負けるほど、私は弱くありませんよ」

（行きますよ、シロウ）

＞了解した＜

私はサーヴァントを【英霊・エミヤシロウ】で展開する。

「それがウリアのＩＳか」

「はい。　これがアインツベルンが私のために用意したＩＳ『サーヴァント』です。　では、行ってきます」

ビットを飛び立ち、アリーナに飛ぶ。
そこには既にセシリア・オルコットがいた。

「来ましたか」

「はい。　あなたの鼻をへし折る為に来ました」

「言いますわね……。　絶対に見返して見せますわ！」

「やれるものならやってみなさい。　アインツベルン家次期当主の名において、代表候補生に負けることは赦されない。　ですので、私が勝ちます」

『二人とも、準備はいいですか？』

「大丈夫です」

「私もです」

『では、試合開始！』

開始直後に私は『干将・莫耶』を投影する。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘装備で戦う気ですか……。
つくづくあなたはわたくしを馬鹿にしたいようですわね」

「これが戦いやすいだけです。　それと、見た目に騙されていては、足元を掬われますよ」

私は両手の夫婦剣を投擲する。

「どこに投げてるんですか？」

「考えがあることは明白でしょう？」

私が投擲した夫婦剣『干将・莫耶』は互いに引き付けあい、オルコットさんの背後から接近する。

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

剣が爆発し、オルコットさんが爆風に巻き込まれる。

「剣の形をした爆弾ですか……」

「どう受け取るかはあなたの自由です」

再び『干将・莫耶』を投影する。

「また同じ剣」

「これは爆弾でしょうか？　それとも剣でしょうか？」

正解は両方。
エネルギーを籠めた剣を壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）によって爆発させたんです。
「っく！」
悩んでますね。
「行きます！」
接近する。
オルコットさんはレーザーライフル《スターライトｍｋ？》で撃ってくるが、完璧にではないですが【エミヤシロウ】の力を体現している『サーヴァント』の前では見切れます。
連続で撃たれるレーザーをことごとく避け、双剣で斬りかかるが、それは避けられる。
通り過ぎる際に双剣を捨てる。
「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」
剣が爆発し、爆風で私は加速して離れ、オルコットさんはまた巻き込まれた。
「厄介な剣ですわね……」
「そろそろ第三世代の兵器を出したらどうです？　ブルー・ティアーズの名前の由来である兵装を使わずに負けるつもりですか？」
「でしたら、遠慮なく！」
四基の自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を射出する。

四基のブルー・ティアーズ――――面倒なのでビットでいいですね――はオルコットさんの命令を受けて接近し、レーザーを放ってくる。
私はそれを全て避ける。
もうわかりました。
オルコットさんはビットから撃つレーザーは全て背後、真上、真下の常人なら反応の遅いところを狙っている。
そして、ビットを操っているときはオルコット自身が動けない。
ライフルで撃ってはいますが、その場から動けていない。
それに、データで見ましたが、後ビットは二つあるみたいですが、それでも余裕ですね。

「なんで当たりませんの！？」

狙いが簡単だからです。
さて、終わらせましょう。
『干将・莫耶』を投影し、投擲する。
それを移動しながら行い、アリーナには計五組の『干将・莫耶』が舞っている。

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）！」

ドォォォンッ！

先ほどまでの爆発とは桁違いの爆発が起こる。
その爆発により、四基のビットは破壊され、オルコットさんはボロボロになった。

「あれを受けてまだシールドエネルギーが残っているんですか」

「……ギリギリでしたわ。　ティアーズの操作を止めて動いてなければあれで負けてましたわ」

あれで終わらせるつもりでしたが、動いて爆発の直撃から逃げているとは。

正直言って、予想外でした。

「これで終わらせましょう」

投影したのはただの弓と剣。

この状態で『偽（カラドボルグ？）・螺旋剣』を使うと大変なことになります。

だから、ただの剣を矢として放つ。

エミヤシロウの弓は百発百中。

ですから、外すわけにはいきません。

「せめて一撃でも！」

レーザーを撃ってきますが、それは避けながら矢を放つ準備を終える。

「これで終わりです」

構えた弓から放たれた矢は見事オルコットさんに当たり、シールドエネルギーが尽きた。

『試合終了。　勝者――――ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』

私は、代表候補生相手に無傷で勝利した。

「アインツベルン、三十分の休憩後に織斑との試合を行う。　準備をしておけ」

「わかりました」

三十分後ですか。
あまり休憩はいらないんですけどね。

「一夏、一次移行は終わりましたか？」

「あと少しだな」

三十分の休憩なんでしょうか。

「にしても、強いな、ウリアは」

「このＩＳのおかげでもありますよ。　私の『サーヴァント』はかなり特殊ですから」

「そうなのか？　でも、流石だよ」

「ありがとうございます」

やっぱり、一夏といると落ち着きます。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

ウリア対セシリア（後書き）

「早く一夏と戦ってみたいです」

「私は上手く書けるか自信がありません」

「一夏を格好良く書いてくださいね？」

「精一杯頑張ります」

ウリア対一夏　そして……

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「織斑、アインツベルン、そろそろ時間だ」

「「わかりました」」

一夏のＩＳの一次移行も終わり、私の休憩時間の三十分が終わろうとしていた。

「さて、いい試合をしましょうね、一夏」

「おう。　勝てなくとも、一矢報いるくらいはやってやるさ」

「では、私だけの力で戦いましょう」

＞誰の力を使うつもりなのですか？＜

（今回は宝具は使いません。　サーヴァントと私自身の力で戦います）

英霊の力を使うには『サーヴァント』の元々の姿を変えるが、今回のこの試合では、元々の姿で戦いたい。

＞わかりました。　ですが、あまり無理をなさらないように＜

（わかっています）

さて、時間ですね。

「行きましょう、『サーヴァント』」

私を纏うのは、先ほどとは違い、雪のように真っ白な装甲。
これが『サーヴァント』の元々の姿。

「あれ？　さっきのとは違うな」

「私のＩＳは特殊でして。　この姿が本来の姿になります」

「そうなのか。　んじゃ、戦うか」

「そうですね」

私と一夏は一緒に飛び立ち、アリーナの上空で向かい合う。
一夏のＩＳは『白式』。
その名の通り、純白の装甲に包まれている。

「一夏、操縦の方は大丈夫ですか？」

「まあな。　二回目でこれだけ動かせるのも、ウリアのおかげだ」

「そうですか。　では、始めましょう」

ブザーが鳴り響き、私と一夏の試合が始まる。

ＩＳから知れる情報から、一夏の持つ武器は、近接特化ブレード《雪片弐型》だというのがわかった。
世界最強の名を持つ千冬さんが現役時代に使っていた《雪片》の後

続武器。
もしも《雪片》の能力をも受け継いでいるのなら、厄介ですね。
「行きますよ、一夏！」
「来い、ウリア！」
私は両手に黒鍵を持ち、接近する。
ギィィィン！
私の黒鍵と一夏の雪片がぶつかり合う。
「手数では私のほうが上です。　どう捌きますか？」
両手の黒鍵は合計で六本。
投擲したりも出来るため、近接戦闘しか出来ない一夏の方が不利だ。
「双剣との戦いも一応はわかってる！」
「私の武器はこれだけじゃないですよ！」
鋼糸で鷹を作り上げる。
「な！？」
「驚いてはいけませんよ、一夏」
鷹を一夏に向けて飛ばす。
これは、ＩＳを自動追尾するため、私が操作をしなくても扱える。

だから、私は鋼糸の操作に思考を使わなくて済む。
「私と鋼糸、二つの攻撃をどう捌きます？」
「ちっ！　厄介だな」
鋼糸の鷹は独立して一夏を狙い、私自身も一夏を狙う。
両手の黒鍵と一夏の雪片が幾度もぶつかり合う。
「隙ありです、一夏」
「なに！？」
鋼糸で出来た鷹が鋼糸に戻り、一夏を拘束する。
「その鋼糸は剣でもあるんです。　締め付ければ締め付けるほど、シールドエネルギーは削られる。　そして、私は自由に動けます」
両手の黒鍵で鋼糸を断ち切らないようにしながら切り裂く。
「ぐっ！　あっさり負けて堪るかぁ！」
雪片の刀身が光を帯び、巻きついていた鋼糸を断ち切った。
やはり能力も受け継いでいましたか！
私は一夏から距離を取り、黒鍵を投擲する。
だが、それは避けられ、防がれる。
「やっと動ける！」
一夏が急接近してくるのを、私は新たな黒鍵を展開して迎え撃つ。

「うおおおっ！」
「はあああっ！」
直進してくる一夏の斬撃を右手の黒鍵三本で逸らし、左手の黒鍵で一夏を斬る。
『試合終了。　勝者———ウリアスフィール・フォン・アインツベルン』
それで一夏のシールドエネルギーが尽き、私の勝利で終わった。

◇

「強いな、ウリアは」
「一夏も二回目とは思えませんでしたよ。　まさか鋼糸が断ち切られるとは思いませんでした」
「逆に俺は鋼糸に縛られるとは思わなかったぜ」
「あの鋼糸は相当な強度があるんですけどね。　あれが雪片の力ですか」
「そうだ。　《雪片》の特殊能力『零落白夜』の真価は『バリアー

無効化攻撃』。　相手のバリア残量に関係なく、それを切り裂き本体に直接ダメージを与えることが出来る。　あの鋼糸、エネルギーが籠められていたのだろう？」

「はい。　あの鋼糸にはエネルギーを通わせて自立追尾を可能にしました」

「零落白夜は斬る対象がエネルギーである限り、それを消滅させる。
まあ、エネルギー装備に対しては最強だ」

「そんなに凄いのか」

「だが、当然欠陥もある。　あれは自らのシールドエネルギーを攻撃に転化させているのだ。　つまり、諸刃の剣だ」

でも、いくらエネルギーに対しては最強だとは言っても、消滅対象が零落白夜の消滅させれるエネルギー以上の攻撃だったら通用するはずです。
宝具の真名開放ならいくら零落白夜と言えど、消滅させるのは容易ではないだろう。

「なんにしても、今日はこれでおしまいだ。　帰って休め」

では、戻りますか。

「あーアインツベルン。　少し話がある」

「話ですか？　わかりました。　すみませんが一夏、先に戻っていてください」

「俺なら待ってるぞ？」
「長引くかもしれん。　先に戻っておけ」
「ということらしいです」
「わかった。　先に戻ってるからな」
一夏はピットから出て行き、いつの間にかここには私と千冬さんしかいなくなった。
「ウリア」
名前？
プライベートみたいですね。
「もしかして、一夏とのことですか？」
「ああ。　私はお前と一夏の行動を見ていた。　お前ら、付き合っているのか？」
「……はい。　私と一夏は付き合っています」
「私はお前の気持ちも、一夏の気持ちも知ってはいた」
千冬さんがドイツ軍で教官をしていたときに、何度かあって話をしました。
そのときに言ったんですよね。
「正直言って、私はお前たちが繋がってくれて嬉しい。　だがな、

一夏は私の大事な家族だ」
「それはわかっています」
一夏と千冬さんは両親に捨てられてしまっている。
だから、一夏の唯一の家族なのだ。
「私を認めさせてみろ」
「……どのようにして？」
「ここはＩＳ学園だ。　言いたいことがわかるか？」
「つまり、ＩＳで戦えと？」
「そうだ。　お前の腕とそのＩＳの相性は世界最高だ。　その力を持ってして、私を倒して見せろ」
私が『サーヴァント』を使ったときのＩＳの適正値のランクはＳＳＳランク。
つまり、過去最高のＳランク保持者である、モンド・グロッソのヴァルキリー、ブリュンヒルデ以上のランクである。
ＩＳの適正値に関しては、全世界の頂点である。
ましてや、『サーヴァント』は伝説の英雄たちの力をも扱うＩＳ。
英霊たちの力を貸してもらう以上、負けるわけにはいかない。
「わかりました。　日時はいつでしょうか？」
「今週の日曜日だ。　私とて準備が必要だ」

「日曜日ですね？　わかりました」

「私が伝えたかったことは以上だ。　もう戻っていいぞ」

「失礼します」

私は千冬さんに一礼し、ピットを後にした。

相手は千冬さん。

現役時代よりも劣っていると言っても、世界最強であるのは変わらない。

でも、一夏との交際を認めてもらうため、絶対に負けるわけにはいかない！

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

ウリア対一夏　そして……（後書き）

「オリジナルの英霊を出そうかと考えてます」

「オリジナルの英霊及びに宝具のアイディアがあれば、教えてくださると私も作者も助かります」

「必ず出すとは言えませんが、アイディアがあれば教えてください」

「「お願いします」」

クラス代表決定

Ｓｉｄｅ～ウリア～

オルコットさん、一夏との試合のあった次の日のＳＨＲ。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。　あ、一繋がりでいい感じですね！」

山田先生は嬉々としてしゃべっているが、一夏だけは暗かった。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「俺は昨日の試合、ウリアに負けたんですが、なぜクラス代表になっているんでしょうか？」

「それは――――」

「私はオルコットさんと戦いはしましたが、私は誰からの推薦もありませんでしたし、私も立候補はしてないのでクラス代表にはなれないんです」

「しかも、アインツベルンは恐らく学園最強だ。　そんな奴がクラス代表になってみろ、他のクラスのやる気が起こる分けなかろう」

織斑先生が補足説明をしてくれました。

「そういうことらしいです。　で、私は全ての試合で勝っているので、私が決めさせてもらいました」

「何で俺にしたんだよ！？　オルコットだっていただろうが！」

「他国をああも簡単に侮辱するような人がクラス代表に相応しいはずないじゃないですか。　それに、クラス代表になればＩＳの操縦は他よりも伸びやすいはずですので、一夏にさせてもらいました」

一夏は他よりもスタートが遅い分、少しでも経験が積めたほうがいいんです。

「あ、あのっ！」

声をしたほうに向くと、オルコットさんが立ち上がっていた。

「この度は織斑一夏さんや日本のことを侮辱してしまい、申し訳ありませんでした！」

頭を下げて謝ってきました。

「知りもしないのに男だからという理由で、侮辱してしまい申し訳ありませんでした！」

「いや、俺はあんまり気にしてないから。　だから頭上げてくれないか？」

「そうです。　あの時は私も言い過ぎました。　これから改めてくれればそれで構いません」

一夏のことを侮辱されたからと言って、やり過ぎてしまいましたし。
ですが、後悔はしません。

「しかし！　それではわたくしの気が済みませんわ！」

「では、一夏と模擬戦をしてください。　私のＩＳは中・遠距離と言うものが少ないですから」

全くないわけではないんですが、多くが近距離戦闘ですからね。
マシンガンとか、レーザーと言った射撃武器はほとんどありません。
弓ならあるんですが……。

「一夏もそれでいいですよね？」

「ウリアがいいのなら、俺も構わないぞ」

「……わかりましたわ。　その役目、務めさせていただきます」

これで一件落着ですね。

「クラス代表は織斑一夏。　依存はないな」

はーい、と一夏を除くクラスメイトが返事をした。
一夏、私も手伝いますからそんなに落ち込まないでください。

☆

そして日曜日。
私と千冬さんの試合の日になった。

「来たか、ウリア」

「はい。　一夏との交際、認めさせてみせます」

「ここでの試合を見る者はいない。　私も全力が出せる」

「それは私も同じことです。　『サーヴァント』の真価を見せてあげます」

今回は英霊たちの力を存分に使うつもりです。
真名開放を使うために設定しなおしたりもしましたし。

「束に頼んでおいて正解だったな」

「束さんですか？」

「あいつを知っているのか」

「はい。　何度か家のほうに来てますし、それにちょくちょく来て

ますから」

「私を呼んだ～？」

なぜかここにいる束さん。
それより、相変わらずの変な格好ですね。
機械的なウサミミをつけた、一人不思議な国のアリス的な服装です。
それにしても、本当に

「「なんでここにいる（んですか）？」」

千冬さんも疑問のようです。

「酷いっ！　折角最終チェックしに来たのに！」

「そうか。　では、早く頼むぞ」

「任せなさいっ！　この束さんに掛かればちょちょいのちょいだ！」

千冬さんが渡した待機状態のＩＳのコンソールを開き、高速でチェックをし始める束さん。
相変わらずふざけているのに頭はいいですね。
一週回って馬鹿でもありますが。

「ねえウーちゃん。　今酷いこと考えなかった？」

なんでわかったんでしょうか？
エスパーですか？

「……気のせいです」

「今の間は何！？」
「相変わらず滅茶苦茶な人だと改めて実感しただけです」
「それって褒めてるの？　それとも貶してるの？」
「両方です」
「酷いっ！」
そんな会話をしながらも作業のペースは変わらない。
本当に頭はいいですね。
流石自称天才。
「お、ウリア。　いないと思ったらこんなところにいたのか」
「い、一夏！？　なんでここに！？」
「白式がここだって教えてくれた」
「おっ！　久しいね～、いっくん！」
「束さん！？　なんでここに！？」
一夏が驚くのも無理はありませんね。
だってこの人大絶賛指名手配中の人ですからね。
「ちーちゃんに呼ばれたからだよー。　ウーちゃんと戦うからって」

一夏には黙っていたんですけどね。
ばらされちゃいました。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

クラス代表決定（後書き）

「次回はウリア対千冬です」

「一夏との交際を認めてもらうため、絶対に勝ちます！」

「おおっ、やる気が逆っている！」

「千冬さん公認のカップルになってやるー！」

ウリア対千冬！　交際の行方（前書き）

ウリア対千冬です。
上手く掛けてるかはわかりませんが、どうぞ。

ウリア対千冬！　交際の行方

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「……今、なんて？」

「私とウリアが戦うんだ」

「なんで！　なんでウリアと千冬姉が戦うんだよ！」

「それは、私と一夏との交際を認めてもらうためです」

「それってどういう……」

「私はお前とウリアが付き合うのは嬉しい。　だがな、お前は私の唯一の家族だ。　だからこそ、私は強き者しかお前の相手には認めない」

「ということらしいです」

「大丈夫なのかよ！」

「安心してください、一夏。　私は、負けるつもりはありませんから」

一夏と別れるなんて、絶対に嫌ですしね。

「……わかった。　絶対千冬姉を認めさせてくれよ」

「任せてください。　一夏の期待に応えて魅せます」

「束、もういいか？」

「完璧だよ、ちーちゃん！」

「ではやるぞ、ウリア」

「はい」

私と千冬さんは各々のＩＳを纏う。
私はサーヴァントを【英霊・アルトリア・ペンドラゴン】で展開する。

「それは……」

「これは私が現役時代に使っていた『暮桜』だ。　束に頼んで第三世代並のスペックに上げてもらった」

「準備とはこのことでしたか」

「いきなり『暮桜を強化してくれ』って言われたときはビックリしたぜぃ」

相手は最強であったときの姿そのもの。
一瞬の油断でも命取りですね。

「では、始めましょう」

私と千冬さんはアリーナ上空で向かい合う。

千冬さんの手には、一夏の《雪片弐型》の元になった刀、《雪片》が握られている。
私は、アルトリアの武器、不可視の剣を持っている。

『二人とも、準備はいいかな～？』

「大丈夫です」

「始めろ」

『オッケー！　んじゃ、試合、開始っ！』

開始直後に私は千冬さんに向かって飛ぶ。

ガギィィィン！

「見えない剣か。　厄介だな」

この剣は、『風王結界（インビジブル・エア）』という宝具で剣を覆い、大気を圧縮させて光を屈折させ、剣本来の姿を隠している。
刀身が見えない分、刀剣の長さが掴めないため、剣のリーチがわからなくしているため、相手が強くても初見の相手なら厄介だ。

「はぁああ！」

「くっ！」

「避けるではないか」

アルトリアの直感は未来予知にも近い危機を察知するので、アルト

リアの状態だと、私自身もそれなりに直感が働いている。
流石に未来予知とまでは行かないが、この直感はとても助かっている。

「さて、その剣の姿を見せてもらおうか！」

「！」

雪片の刀身が光っている。
あれは『零落白夜』！
まずい！

「逃がすか！」

「くっ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で急接近してきたため、『零落白夜』を不可視の剣で防ぐ。
そして、『零落白夜』のエネルギー無効化により、『風王結界』の風邪が断ち切られ、刀身があらわになる。
私の持つ剣は、黄金に輝き、雪片とぶつかり合っている。

「その剣の長さは見切った。　これで惑わされずに済む」

まずいですね……。
千冬さんの剣の腕は達人級で、なおかつＩＳ操縦者の頂点に立っている人だ。
まだ真名開放がありますが、それでも私が不利です。

＞大丈夫です。　落ち着いてやれば、勝機はあります＜

（そうですね。　弱気になっていたら、認めてもらえるものも認められません！）

＞その意気です＜

（行きますよ、アルトリア。　私たちの力、見せてあげましょう！）

＞はい！＜

勝つには真名開放の瞬間を見定めなければなりません。

「！　っふ、いい眼だ。　来い、ウリア！」

「はい！　これからが本当の戦いです！」

再び互いの得物でぶつかり合う。

“アレ”を放つには一瞬でも時間が必要になる。

その時間を作る手はある。

だけど、それをやる隙がない。

隙がないなら、自分の手で作ればいい。

「隙だらけだ！」

「いいえ、それは貴女の隙です」

「なに！？」

私は、自ら隙を作りそこに攻撃を誘導させたのだ。

だからこそ、反応も出来るし、次への一手に繋げれる！

「『風王鉄槌（ストライク・エア）』！」

剣を覆っていた風を解放し、威力の持った暴風へと撃ち出す。

「くっ！」

『風王鉄槌』の威力をいなしたが、それでも風により飛ばされ、体勢を崩す。

生まれた大きな隙と時間。

これを逃せば、私の勝ちは無い。

この、最大のチャンスを勝利の為に！

「これが最後の攻撃です！」

不可視の剣から、膨大な光が現れる。

「この攻撃は、一夏との交際を認めてもらう為に！　大好きな一夏と別れない為に！　だから！」

私は光を放出する剣を頭上に上げる。

「この一撃に、私たちの勝利を約束させる！」

この一撃は、私と一夏の思いを乗せた一撃。

この一撃は、私と私を助けてくれる英霊たちの一撃。

この一撃は、私たちの勝利を約束してくれる一撃！

「いいだろう！　受けて立つ！」

千冬さんは体勢を立て直し、雪片を構える。

「＞約束（エクスカリバー）された勝利の剣ァァァァァァ！！！！＜」

「零落白夜ぁぁぁぁぁぁ！！！！」

膨大な光による『究極の斬撃』と、あらゆるエネルギーを絶つ『究極の剣戟』がぶつかり合う。

「「＞はあああああああっ！！！！＜」」

『試合終了！　勝者――――

ウリアスフィール・フォン・アインツベルン！』

『究極』の攻撃同士の戦いは、私たちの斬撃の勝利で終わった。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

私は息も絶え絶えなんだけど、千冬さんはエクスカリバーを受けたため、気絶していた。

そのため、千冬さんは重力に従って落下していった。

助けなきゃ。

だけど、身体が重くて速さが出ない。

このままじゃあ千冬さんが！

＞私にお任せを。　我が主よ＜

一瞬サーヴァントが光り、サーヴァントから放たれた光が千冬さんへと向かい、千冬さんが地面に当たる五十センチほどのところで光が晴れ、光から現れた男性が千冬さんを助けた。

「ありがとう、ディルムッド」

彼はディルムッド・オディナ。
ケルト神話に出てくる英霊で、“輝く貌”の異名を持つ。
「主よ、彼女は私が連れて行きますので、戻りましょう」
「ええ。　そうします」
私とディルムッドは、ゆっくりとピットへと戻っていった。
「お疲れ、ウリア。　千冬姉は大丈夫なのか？」
「気絶しているだけだ。　もうしばらくもすれば眼を覚ますはずだ」
「ありがとうございます、ディルムッド」
「では、私はこれで」
ディルムッドは光り、サーヴァントへと戻った。
「ウリア、あの人は？」
「彼は私のサーヴァントに宿る英雄の霊、英霊の一人です。　私のＩＳは、彼らのおかげで装甲の変化などが起こるんです」
「だから姿が変わったのか」
「そうなんです。　にしても、やりすぎてしまいましたね……」
認めてもらいたい一心で、無我夢中でつい思いっきりやってしまい

ました。
死んでしまわないように、設定しなおして制限を掛けたのですが、まだ威力が高かったようです。
「……んっ」
「ちーちゃん！」
「束、離れろ……」
束さんは千冬さんに抱きついていました。
「すみません、千冬さん……」
「気にするな。　あれは事故であって、お前の所為ではない」
「しかし……」
「気にするなと言っておろうが。　まあいい。　私は言っていたとおり、お前たちの交際を認める」
「「！」」
「やるな、とは言わんが、避妊はしろよ。　在学中に妊娠なんて堪ったものではないからな」
「「千冬さん（千冬姉）！？」」
絶対顔が赤いです……。
た、確かにしたいですけど……。

「うんうん。　初々しいねぇ」
のんきな……。
「まあ、節度は守れよ」
「わかってます／／／」
うー、まだ顔が熱い……。
「では、私は戻る。　少し疲れた」
「私たちも戻りましょう、一夏」
「そうだな」
「束さんも帰るよ。　じゃあ、またね、ちーちゃん、いっくん、ウーちゃん！」
束さんはどこかに走り去っていった。
「改めて、よろしくね、一夏」
千冬さん公認になれた。
私の両親にも今度ちゃんと言っておかなきゃね！
この日は、私は部屋に戻ってからはぐっすり眠った。
千冬さんとの戦いは疲れました。

Side～ウリア～out

ウリア対千冬！　交際の行方（後書き）

ウリアが勝つのは予想できましたよね……。
才能が欲しい……。

一夏の就任パーティー（前書き）

追加設定。
ウリアの誕生日。
６月１５日。
これだけ。
また増えるかもしれませんが、今のところこれだけ。
設定のほうにも加えておきます。

一夏の就任パーティー

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行実践を実践してもらう。　織斑、アインツベルン、オルコット。　試しに飛んでみせろ」

四月も下旬になり、本日も千冬義姉さんこと、織斑先生の授業を受けています。

「早くしろ。　熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

あれ？

一夏はまだ展開できていませんね。

他のことでも考えているのでしょうか？

「よし、飛べ」

ちなみに、私は今は通常形態である。

「何をやっている。　スペック上ではアインツベルンはともかく、オルコットのよりは出力は上だぞ」

順番で言うと、私、セシリア、一夏の順番。

遅いですね、どうしたのでしょうか？

「大丈夫ですか、一夏？」

「ああ、なんとかな」

急上昇、急停止は最近やり始めた分ですしね。
でも、ちゃんと出来ていたはずなんですが……。

「体調でも悪いのですか？」

「大丈夫だ。　もう切り替えたから」

やっぱり何か考えていたようです。

「織斑、アインツベルン、オルコット、急降下と完全停止をやって見せろ。　目標は地表から１０センチだ。　アインツベルンは地表から３センチだ」

私だけ差別ですか？
けど、大丈夫ですけど。

「私から行きますね」

私は急降下し、地表５ミリの位置で停止した。
クラスの皆さんから拍手されました。
これくらいできないと、千冬義姉さんに申し訳ありませんしね。

私に続いて降下してきたのはセシリア。
難なくクリアしました。
流石は代表候補生と言うところですね。

最後は一夏です。
大丈夫でしょうか……。

『ウリア、大丈夫だ。　俺を信じろ』

プライベート・チャンネルで一夏から声が聞こえました。
私、そんなに不安そうな顔してましたか？

＞物凄くしてましたよ＜

そうなんですか。
でも、心配なのは仕方がないと思うんですね！
だって一夏が怪我をすると思うと、平常心でいられる自信がありません！

＞それは威張るようなことではない。　そういうときほど平常心でいなければ、一夏に愛想つかされるぞ＜

（話しかけてもないのに、私の心を読まないでください。　それと、あれは冗談です）

＞主よ、気のせいに聞こえないのは気のせいでいいんですよね？＜

（大丈夫です！　大怪我でもしたらわかりませんが……）

一夏が大怪我なんてしたら、平常心でいられるほうがおかしいです。
千冬義姉さんでも取り乱すかもしれません。

あ、一夏が急降下を始めました。
よかった、墜落はしなかったようです。

「13センチ。　まだまだだが、まあいいだろう」

まだ始めたばかりですからね、大丈夫です。
一夏は物凄くの見込みが速いですから。

「織斑、武装を展開しろ」

「はい」

一夏は雪片弐型を展開する。

「遅い。　０，５秒で出せるようになれ」

手厳しいですね。

「オルコット、武装を展開しろ」

一秒と経たずに展開、射撃可能まで完了しています。
流石、と言いたいところですが、

「さすがだな、代表候補生。　――ただし、そのポーズはやめろ。
横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。　正面に展開できるようにしろ」

こういうことなので、少々残念ですね。

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――」

「直せ。　いいな」

「……はい」

千冬義姉さんは人睨みして黙らせます。
流石ですね。

「オルコット、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。　あ、はっ、はいっ」

手の中の光はなかなか像を結ばず、くるくると空中をさまよっている。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。　――ああ、もうっ！《インターセプター》！」

もうやけくそですね。
初心者用の手段であるため、代表候補生であり、プライドの高いセシリアにとっては相当屈辱的なことでしょう。

「……何秒かかっている。　お前は、実践でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません！　ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。　アインツベルンとの試合では、宙を舞う剣に手も足も出なかったように見えたが？　あの様でアインツベルンが特攻してきても間合いに入らせないと？」

「あ、あれは、その……」

千冬義姉さん、なかなか毒を吐きますね。

「では、見本でも見せてもらおう。　アインツベルン、武装を展開しろ」

「わかりました」

私の手元がほんの一瞬光り、光が晴れた頃には両手に黒鍵が握られている。

そして、それを一瞬で収納し、新たに弓を展開。

また収納し、最後に銃を出す。

『高速切替（ラピッド・スイッチ）』と呼ばれる技術ですね。

「あそこまで速くなれとは言わんが、あれが最も理想的な形だ。よく覚えておくように」

ラピッド・スイッチは努力だけじゃあ難しいですよ。

だって、ラピッド・スイッチの真髄は、多彩な武器を状況に応じて切り替えて戦うことですから。

いくら切替が早くとも、状況判断ができなければ宝の持ち腐れですからね。

でもまあ、覚えておいて損はないですけど。

「時間だな。　今日の授業はここまでだ」

授業が終わりました。

☆

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでと～！」

クラッカーが乱射される。

皆さん、盛り上がってますね。

ですが、このパーティーの主役の一夏は暗いですけど。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。　同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

相槌打っているのは一組の人ではありませんよね。

そもそも、クラスの人数を明らかに超えてますし。

「すみません、一夏。　私が出来ればよかったんですが……」

「気にするな。　俺はウリアのその気持ちだけで嬉しいから。　千冬姉倒せる人が代表になっちゃ駄目だしな」

「一夏、あれはまぐれですよ。　最後の約束された勝利の剣（エクスカリバー）が上手く決まったから、勝てたんですから」

「まぐれであっても、それもウリアの実力だぜ」

一夏……。

やっぱり一夏は格好いいです。

「はいはーい、新聞部でーす。　話題の新入生、織斑一夏君と、姿を変えるＩＳを使うアインツベルンさんにインタビューをしに来ました～！」

一同盛り上がりました。

というか、私にもですか？

「あ、私は二年の黛薫子。　よろしくね。　新聞部副部長やってまーす。　はいこれ名刺」

あ、私にもくれました。

とりあえず、画数の多い字ですね。

「ではまず織斑君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。　もっといいコメントちょうだいよ～。　俺に障るとヤケドするぜ、とか！」

久しぶりに聞きましたね、その台詞。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」
日本の名優を侮辱しますか。
そういうあなたも前時代な台詞を言ったじゃないですか。
「う～ん、じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」
それでいいんですか、新聞部。
「アインツベルンさん、あのＩＳは何？　姿が変わるという話ですが、その真相は？」
まともな質問ですね。
ですが、それには答えられません。
「それには答えることはできません。　企業秘密ですから」
企業秘密を暴露するわけがありません。
というより、教えたところで真似なんてできませんが。
なぜなら、この『サーヴァント』が使えるのは私だけですし、英霊はアインツベルンしか呼べませんから。
「んー気になるけど、仕方がないね。　じゃあ、専用機持ち三人でスリーショットでももらいますかね」
写真ですか。
一人邪魔なのがいますが、気にしないようにしましょう。
きっとクラスの皆が乱入してくると思いますから。
「それじゃあ撮るよー。　３５×５１÷２４は～？」

「え？　えっと……」
「７４，３７５ですよ、一夏」
「お、正解！」
「うおっ！」
パシャッとシャッターが切られる。
一夏に抱きついて正解でしたね。
だって――――
「なんで全員入ってるんだ？」
――――本当に私の予想通りに動きましたから。
「あ！　アインツベルンさん、織斑君に抱きついてる！」
「羨ましい！」
皆さんが騒ぎ出しますが、気にしません。
もうこの際、一夏の彼女が私であるとばらしてしまいましょう。
「みんなの前で抱きつかなくてもいいだろ？」
「一夏は私が嫌いですか？」
「そんなわけないだろ。　ただ、人の目を考えてほしくてだな」
「いいじゃないですか、見せ付ければ。　千冬義姉さんからも認め

てもらっているんですから」

「でも、よかったのか？　ばれると厄介だって言ってただろ？」

「どうせ後々ばれるんです。　ちょうどいいですし、この際ばらしてしまったほうが良いかと思ったので」

「そうか？　ウリアがいいのなら、俺も良いんだけど」

一夏の了承も得ましたので、ばらしちゃいましょう。

「……えっと、織斑君とアインツベルンさんの関係は……？」

「恋人です♪」

「え？」

「俺とウリアは、恋人同士です」

『『『えええええええええええええええっ！？！？！？！？』』』

食堂でみんなの絶叫が響きます。

「ちなみに、千冬義姉さん公認です♪」

『『『えええええええええええええええっ！？！？！？！？』』』

また大絶叫が響く。

耳がキーンとなりました。
「なにを馬鹿騒ぎしている！」
千冬義姉さんが来ました。
でも、バッドタイミングです。
「あ、あのー付かぬ事お伺いしますが、織斑君とアインツベルンさんの交際を認めているって本当ですか？」
「なんだ、もうばらしたのか」
「はい。　この際ばらしてしまおうかと」
「そうか。　確かに、認めている」
千冬義姉さんがそう言うと、この場にいるほとんどの人がｏｒｚとなりました。
千冬義姉さんの発言力は大きいようです。
「織斑、アインツベルン、今のうちに戻っておけ。　復活する前に逃げておくことをお勧めする」
「そうですね。　では、私たちは部屋に戻ります。　行きましょう、一夏」
「おう。　そうだな」
私と一夏は部屋に戻り、その日はやりすごした。
でも、もしかしたら明日問い詰められるかもしれませんね。

Side～ウリア～out

一夏の就任パーティー（後書き）

「関係ばらしちゃいましたね」

「一夏に色目を使う人がいたので、ちょうどよかったのでばらしてしまおうと思ったんです」

「本音は？」

「色目を使う人たちに耐えられなくなってきたので、失意させてあげようかと」

「結構黒いですね。　白銀なのに（ボソボソ）」

「何か言いましたか？」

「いいえ、なにも」

中国代表候補生登場（前書き）

空気だった原作ヒロインを出して行きたいと思います。
あまりにも空気過ぎたので、反省しました……。

中国代表候補生登場

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「織斑君、アインツベルンさん、あはよー。　ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？　今の時期に？」

今はまだ四月で、この時期に転校生とは珍しいですね。
このＩＳ学園への転入は条件が厳しく、試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになっている。
だから、必然的に――――

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

国の代表候補生になる。
一夏と白式のデータ目当てでしょうか？

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

イギリス代表候補生のセシリア・オルコット。
腰に手を当てたポーズをよくしているのですが、なぜか似合っています。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどのことでもあるまい」

彼女は篠ノ之箒。

ＩＳ開発者の篠ノ之束さんの妹で、一夏の幼馴染です。

「どんなやつなんだろうな」

「気になるんですか？」

「ん？　ああ、少しは」

「……ウリアさんという人がありながら、他所のクラスの転校生に現を抜かす気ですか？」

「一夏、私じゃあ駄目なんですか？」

「違う！　代表候補生なんだから、どれだけ強いのかが気になっただけだ！」

「……信じますよ？」

「ああ。　俺はウリア以外考えられないから」

「一夏……」

「ゴホン。　お前ら、いちゃつくなら二人っきりのときにしてくれないか？」

「あ、すみません」

「悪い」

ちょっと怒ってますね。

まあ当然ですか。
だってパーティーのあった次の日、箒に呼び出されましたから。
内容は一夏について。
箒は小学校のときからずっと好きだったようです。
一夏は箒には好きな人がいると言っていたらしいんですが、それでも頑張っていたようです。

「ま、相手が誰でも負ける気はないけどな」

その意気ですよ、一夏。
勝利へのイメージは重要ですからね。

「織斑くんが勝つとクラスのみんなが幸せだよー」
「織斑くん、がんばってね！」
「フリーパスのためにもね！」
「今のところ専用機を持っているクラスは一組と四組だけだから余裕だよ」

「――――その情報、古いよ」

教室の入り口から声が聞こえました。
どちら様でしょうか？

「二組も専用気持ちがクラス代表になったの。　そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？　お前、鈴か？」

一夏、知っているんですか？

「そうよ。　中国代表候補生、凰鈴音。　今日は宣戦布告に来たってわけ」

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんてことを言うのよ、アンタは！」

誰なんでしょうか？
とても仲がいいように見えますが……。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！
千冬義姉さんの登場です。

「もうＳＨＲの時間だ。　教室に戻れ」

「千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。　さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。　邪魔だ」

「す、すみません……」

千冬義姉さんにビビッていますが、やはり中のいい人みたいですね……。

「またとあとで来るからね！　逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

彼女は二組に消えていきました。

「っていうかアイツ、ＩＳの操縦者だったのか。　初めて知った」

「い、一夏、彼女は誰なんですか……？」

信じて良いんですよね、一夏？
あの子とは何もないんですよね？

「一夏、あの女は誰だ！」

「ウリアさんとはお遊びだったんですか！？」

バシンバシンバシン！

「席に着け、馬鹿者ども」

千冬義姉さんの出席簿で叩かれました。
私はそこまで痛くはなかったのですが、手加減してくれたようです。
でも、気になります。
あの子が誰なのか、あの子とはどういう関係なのかが。

＞ウリアスフィール、彼女が誰であろうと、一夏との繋がりがあるのです＜

＞一夏を信じろ。　奴がお前以外考えられないと言っているのだ。
自信を持て＜

＞そうです。　主は自信を持っていいのです＜

＞一夏の姉に認められているのだろう？　ならば堂々としておればよいのだ＜

＞あの雑種が何をしたところで、お前とあいつの関係が崩れる訳があるまい＜

（皆……ありがとう）

一夏の彼女である私が一夏を信じなくてどうするんですか。
堂々としていればいいんです。

☆

「待ってたわよ、一夏！」

お昼休み、食堂で例の彼女がいた。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。　食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。　わかってるわよ」

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！　大体、アンタを待っていたんでしょうが！　何で早く来ないのよ」

話しか聞いていませんが、この子、理不尽ですね。

「それにしても久しぶりだな。　ちょうど丸一年ぶりか。　元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。　アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

なんてことを考えるんでしょうか、この子は。

怪我や病気になれだなんて。

「一夏、料理が出てきたぞ」

「あちらのほうが空いていますので、そこで食べましょう」

箒、セシリアのおかげで二人の話が途切れました。

混雑しているのに、すぐにテーブルに付けたのはよかったです。

これからお弁当でも作ってみましょうか……。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。　アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。
ニュースで見たときびっくりしたじゃない」
話から察するに、この子は小学校か中学校の頃の友達ですね。
「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」
「そうですわ！　一夏さん、ウリアさんを裏切るつもりですか？」
「彼女が誰なのかは教えてください」
一夏を信じるとはいえ、どういう関係なのかは気になってしまいます。
「あ、悪いな。　こいつは幼馴染だ」
「幼馴染……？」
私も気になります。
いつ知り合ったのかが。
「あー、えっとだな。　箒が引っ越したのが小四の終わりごろだっただろ？　鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。　で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ぶりぐらいだな」
箒と彼女は入れ違いで転校したんですね。
「で、こっちが箒。　ほら、前に話したろ？　小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣道場の娘」

「で、そいつは？」

「彼女はウリア。　前に言っただろ、俺が好きな人だって」

一夏、そんなこと言っていたんですね。

「ウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。　よろしくお願いしますね、凰さん」

「アンタがウリアなのね……。　二人は付き合ってるの？」

あ、この子も一夏のことが好きだったですね。

「あー、俺とウリアは付き合ってるんだ」

「そう……。　アンタ、ちゃんと思い伝えられたんだ」

「ああ」

「よかったじゃない。　再開できて」

祝ってくれるんですね。

諦めがついていたのでしょうか……？

「私の存在を忘れてしまっては困りますわ。　中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？　わ、わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？　まさかご存じないの？」

「うん。　あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

怒りで顔を赤くするセシリア。
代表ならまだしも、代表候補生全員を覚える人はほとんどいないでしょう。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。　でも戦ったらあたしが勝つよ。　悪いけど強いもん。　アンタにも負ける気はないわよ」

「私をご存知なんですか？」

「ええ。　アインツベルン家の次期当主だって国の奴らから聞いたわ」

国ということは、データが目的ですね。
アインツベルンを敵に回してただで済むはずがありませんのに、馬鹿なことを考えますね。

「代表候補生に負けません。　アインツベルン家の当主たる者、非凡でなければならないんです」

当主になるため、代表候補生以上にきつい訓練を色々やってきまし

たから。
それに、千冬義姉さんにも勝ったのに、代表候補生に負けれません。
「そういえば一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」
「おう、成り行きでな」
「ふーん。　絶対に負けないから」
「俺も負ける気なんてねえよ。　負けたら教えてくれるウリアに示しがつかない」
一夏は物凄い勢いで成長していますからね。
代表候補生ともまともに戦えるでしょう。
『零落白夜』の扱い方も、少しですが上達していますしね。
クラス対抗戦、いい試合になりそうです。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

中国代表候補生登場（後書き）

「この話の原作ヒロインたちはもう吹っ切れています。　セシリアに至ってはフラグが立っていません」

「私と一夏の関係が認められているってことですね」

「そういうこと。　鈴は中学校のときに告白したけど、断られていたんです」

「だから、清清しかったんですね」

「そういうこと」

対抗戦へ向けての模擬戦

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「では、今日はセシリアとの模擬戦で」

「わかった」

「わかりましたわ」

「箒は私とやりましょう」

「わかった」

一夏を鍛えるために、今日はセシリアとの模擬戦です。
ついでに、箒も一緒です。

「では、始めましょう」

全員がＩＳを纏う。
今回は通常形態で、近接のみでの模擬戦になります。

「では、よろしく頼むぞ」

「はい。　では、始めますよ」

私は投影した一本の黒鍵を放り投げる。
そして、その黒鍵が地に落ちた瞬間、模擬戦が始まる。

サクッ。

黒鍵が落ち、地に刺さる。
模擬戦スタートです。

「はああっ！」

箒は打鉄を纏い、近接用ブレード一本で挑んできます。
私は、それを左手に持った三本の黒鍵で防ぐ。

「攻撃が軽いですよっ」

右手に持った黒鍵で切りかかるが、当たる寸前で回避された。

「まだまだ！」

「甘い！」

箒の勢いを殺さずに左の黒鍵で受け流し、右の黒鍵で隙だらけの脇腹を斬る。

「くっ！」

「これは剣道であって剣道ではありません。　剣道のルールに縛られないように」

いくら箒が剣道で強くとも、勢いに任せすぎでは簡単に対処できます。

「今度はこちらから行きます！」

☆

「皆さん、お疲れ様です」

「やはり強いな、ウリアは」

箒は前までウリアスフィールと呼んでいましたが、ウリアと呼ぶことを許してあります。

「ＩＳに乗る時間、経験が違いますからね」

様々な武術を会得したりしましたし、私の場合は量より質の訓練でしたから、五百時間ほどでも上達できました。
だって、ＩＳを乗り始めて五時間ほどで代表候補生との模擬戦をやり始められましたからね。
三十時間を越えた頃から人数が増えて、二百時間を越えたら代表候補生五人ですよ？
で、四百時間越えたくらいから『サーヴァント』を授かり、『サーヴァント』を使うようになってからは国家代表レベルと戦うようになりました。
ふと気づいたら国家代表レベルの操縦者三人と同時戦闘なんですから。
他の代表候補生、国家代表とは練習の密度が違います。

「さて一夏、負けてしまいましたね」
頭を切り替えて反省会。
一夏は先ほどの模擬戦は惜しくも負けてしまった。
セシリアも以前よりも強くなっていますね。

「焦りすぎなんだよな」

「そうですね。　一夏の白式は燃費が悪いんです。　零落白夜に瞬時加速、この二つに多くのエネルギーを使用してしまう」

「零落白夜の切り替えがまだ未熟だ」

零落白夜を相手に当たる瞬間だけ発動するのが千冬義姉さんの戦い方。
それを覚えれば燃費の悪い白式でも十分通用します。

「はい。　ですが、成長速度は異常です。　もう零落白夜の切り替えのコツをつかみはじめてますようですからね」

「そうですわね。　確かに一夏の成長速度は異様なほどにお早いです」

「元よりのセンスだろう。　剣道をやっていたときも飲み込みが早かったからな」

「実物を見たことがあるからだな。　完成されたイメージがあるとやりやすいんだ」

「確かにそうですね。　イメージは重要ですから」
英霊・エミヤシロウもいいました。
『イメージするものは、常に最強の自分だ』と。
「零落白夜の切り替えもですが、後一つ、回避が疎かです。　レーザーを避けるより、雪片で受け流すってどういうことですか。　回避しなければ意味ないじゃないですか」
「あー、つい」
「ついじゃありません。　完璧に受け流せるならまだしも、不完全だから地味に削られていくんです。　回避が大事だと何度言えばわかってくれるんですか！」
これでもう五回は言ってますよ。
「わ、悪い」
「その台詞何度目でしたっけ？」
「ウリアの教えを何度破れば気が済むのだ、お前は？」
「すみません……」
いつの間にか一夏は土下座してました。
「一夏、ちゃんと避けることを忘れないでくださいね。　避けることは、攻めることよりも重要なんですから」

「お、おう、わかった」
避けなければ、攻撃する前にやられてしまうかもしれませんしね。
避けることは本当に大事なんです。
避ければ不要なダメージも負いませんしね。
「では、今日は終わりにしましょう。　休むことも大切なんですから」
「それは俺も重々承知している」
「一夏、たまにおじいちゃんみたいなこと考えてますしね」
身体のことに関すると一夏はなぜか異様に詳しかったりする。
「そうだぞ、一夏。　だから『ジジくさい』と言われるのだ」
「ぐぅ……！」
「確かに身体は大切にしなければなりませんが、まだ若いのですから少しくらいはその考えを改まってみては？」
「俺はこれを変えるつもりはない！　なぜなら、身体を悪くすれば悲しむ人がいるからだ！」
「私たちのことを考えていてのことは嬉しいのですが、ジジくさすぎです」
「うぐっ！」

私がそう言うと、一夏は何かに突かれたかのように短い悲鳴を上げた。

「まあ、それも一夏なんですけどね」

「う、ウリアァ……」

「さて、皆さん戻りましょう。　身体が冷えてしまいますからね」

アリーナを後にし、各々部屋に戻る。

そして、今は二人っきりの時間。

「一夏〜」

「っとと。　だからいきなり飛びつくな」

「だって一夏成分が足りないんだもん」

「毎回思うんだが、なんだその一夏成分って」

「一夏成分は一夏成分だよ。　ぎゅぅ〜」

はぁ〜、落ち着く。

「んー、じゃあ、俺もウリア成分って奴を補給。　なんかそれだけで一日動ける気がしてきた」

一夏も私を抱きしめる。

あ、身体が疼いてきた……。

「一夏……」

「わかってるさ。　シャワー浴びてからな」

「うん」

翌日、二人揃って遅刻しかけたのは余談です。
そして、遅れそうになりつつも、クラス対抗戦の相手を見た。
一夏の一回戦の相手は二組。
つまり、凰鈴音だった。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

クラス対抗戦と襲撃

Ｓｉｄｅ～一夏～

試合当日、第二アリーナ第一試合。
相手は鈴だ。
アリーナは満席で、会場入りできなかった人もいる。
俺の目の前には鈴がＩＳ『甲龍（シェンロン）』を纏って試合開始を待っている。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、鈴が空中で向き合う。

「あんたがどこまでやれるか見てあげるわ」

「油断していると、足元掬われるぞ。　ＩＳの操縦にも大分慣れてきたしな」

いくら生身で強くとも、操作に慣れていなければまともに戦うことも出来ない。
ウリアたちとの練習のおかげで、一ヶ月ほどでかなり操縦できる。
ウリア曰く、「もう代表候補生とも戦える」らしい。

『それでは両者、試合を開始してください』

俺たちはブザーが切れると同時に動き出す。

ガギィンッ！！

展開した雪片と、鈴の持つ異形の青竜刀がぶつかり合う。
「思ってたよりもやるじゃない」
「これくらいは序の口だ」
バトンのように回される青竜刀《双天牙月》を雪片でいなす。
「本当にやるわね。　でも、これなら！」
鈴の方アーマーが開き、中心の球体が光った瞬間、衝撃に殴り飛ばされた。
「今のはジャブだからね」
今の一撃で、あれが何なのかは粗方予想できた。
もう一発来たそれを、雪片で受け流す。
「嘘でしょ！？」
俺の予想は当たっていたみたいだ。
「あれは衝撃砲だろ。　しかも、砲弾だけでなく、砲身も見えない」
「たったあれだけで見破るとかどういうふざけた頭してんのよ！」
これも、ウリアとの特訓のおかげだ。
「さて、俺も負けられないんでな。　本気で行かせてもらうぜ！」

俺を鍛えてくれる、ウリアのためにもな！

「アンタにあっさり負けるほど、代表候補生は甘くないわよ！」

「行くぜ、鈴！」

「来なさい、一夏！」

衝撃砲が放たれる前に、俺は加速姿勢に入る。
千冬姉とウリアの試合で千冬姉がやって見せた瞬時加速。
俺はそれを覚え、ひたすら練習してきた。
瞬時加速による急加速。

「はあああっ！」

ズドオオオンッ！！！

鈴に俺の刃が届きそうになった瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。
鈴の衝撃砲ではない。
こんなことできるのは、俺の知る限りウリアの『約束（エクスカリバ）された勝利の剣』だけだ。
だが、そのウリアは今ピットにいるし、そもそもこんなことはしない。

「誰だ？　俺たちの邪魔をする奴は！」

『一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！』

――――ステージ中央に熱源。　所属不明のＩＳと断定。　ロックさ

れています。

「ちっ！」

アリーナのシールドを破るほどの攻撃力を持つＩＳが俺を狙っている。

逃げるわけには行かなくなった。

『一夏！』

ウリアの声が聞こえた。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～ウリア～

英霊たちが感じていた嫌な予感とはこれのことでしたか！

突如メールが届き、相手は束さん。

内容は、作った無人機が何者かによってクラッキングされ、操作できなくなったとのこと。

あれは無人機で、束さんが作ったものと言うのがわかった。

あの束さんに対してクラッキングを成功させるとは、只者ではありませんね。

＞ウリアスフィール、あれには人の気配が感じられません＜

＞そのメールの内容は本当のようだ＜

英霊たちも無人機と言っているので、間違いではないでしょう。

「一夏！　逃げてください！　私が止めます！」

『ウリアか！　俺にやらせてくれ！　こいつは俺の力で止めて見せる！』

一夏の声には、覚悟の篭っていました。

「……わかりました」

「ウリア！？」

「一夏の覚悟を無視することは出来ません。　一夏、聞こえますか？」

『ああ、聞こえているぞ』

「条件があります。　危険だと感じたら、無理矢理にでも止めます。わかりましたね？」

『わかった！』

アドバイスでもしておきましょう。

『一夏、あれは無人機です。　思いっきりやってください』

『無人機？　人が乗っていないのか？』

『はい。　英霊たちがそういっています。　間違いはないでしょう』

『わかった。　無人機なら、全力でやれる』

プライベート・チャンネルを終えて、一夏の様子を見る。

「ウリアよ。　一夏に任せてもよかったのか？」

「一夏がそう言ったんです。　ちゃんとした覚悟を持った一夏を否定することはしません。　ですが、危ないと思えばすぐに介入しますよ」

「アインツベルン、これを見ろ」

「遮断シールドがレベル４に設定されていますね。　しかも扉も全てロックされています。　面倒なことをしてくれますね」

ですが、私にはサーヴァントと英霊がいます。

遮断シールドがいくら強固でも、それを簡単に破る方法はあります。

「ところで、箒はどこに行くつもりですか？」

箒が走ってどこかに行こうとしていたので、止める。

どうせ、馬鹿なことを考えていたのでしょう。

「一夏の邪魔をしないでください。　私たちここで待つしかないんですよ」

「し、しかし！　なぜお前はそんなに落ち着いていられる！　一夏の恋人であろう！」

「確かにそうです。　さっきも言ったように、一夏の覚悟を無視することはしたくないんです。　それに、アインツベルンの次期当主たる者、そう簡単に取り乱していてはその資格はありません。　まあ、一夏が大怪我でもしたらわかりませんが」

「アインツベルン、縁起でもないことを言うな」

「大丈夫です。　一夏は強くなった。　だから、私は信じるだけです」

無事に倒して戻ってくると。
だけど、警戒だけはしておきます。
この世に絶対なんてない。
もしも危険なことになっても、すぐに対応できるように。

（ディルムッド）

＞承知している＜

サーヴァントをすぐに展開し、行動できるように準備をしておく。
準備をしておいて損はありませんから。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～一夏～

ウリアからの情報で、あれは無人機だとわかった。
ウリアが信じてくれる、だから俺はあれを止める。

「鈴、逃げてもいいんだぜ」

「馬鹿言いなさい。　アンタを置いて逃げるほど、アタシは薄情じゃないわよ」

「そうか。　なら、手伝ってくれよ」

「元からそのつもりよ」

鈴がいるなら、多分あれが出来るはずだ。
それは賭けだが、成功すればその効果は高い。

「さて、あいつを止めるぞ」

アリーナを破ったレーザーが放たれるが、俺はそれを避ける。
そして、そのレーザーによって晴れた煙の先には、黒い装甲に覆われた『全身装甲』のＩＳだった。
無人機だから当然といえば当然なのだが、その姿は不気味だった。
手が異常に長く、全身にスラスターがある。
頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には砲門が左右合計四つある。
乱射でもされたら大変なことになるな。
やられる前にやるか。

『鈴、衝撃砲で援護してくれ。　俺は零落白夜であいつを斬る』

『わかったわ。　さっきの試合で互いに被弾が少ない分、チャンスはあるけど、できるだけ早く片付けなさいよ』

『わかってるさ。　早く終わらせて皆のところに戻ろうぜ』

『そうしましょう』

鈴が衝撃砲で牽制を始め、少しずつ接近して衝撃砲で怯んだところで一気に加速して斬りかかる。
だが、全身に取り付けられているスラスターの出力が高く、俺の間合いから逃げられる。

「！」

俺は瞬時加速を使って離脱する。
相手の反撃があったからだ。
だが、その反撃は滅茶苦茶で、長い腕をでたらめに振り回して砲撃をしてきたのだ。
あの砲撃は危険だ。
だから、避けるしかない。

「なんつうふざけた攻撃だよ……」

流石無人機というところだろう。
人の間接がない分、自由に曲げれる。
人間には出来ない攻撃方法も出来る。

「……次で落とす」

大体あの無人機のスラスターの出力は読めた。
まだ抑えているかもしれないが、それでも次で落とす。

「鈴、出来る限りあいつの注意を引いてくれ。　次で決める」

「……わかったわ。　絶対に決めなさいよ」

「ああ」

瞬時加速の準備をしながら、その時が来るのを待つ。
残っているエネルギーの三割を使っての瞬時加速。
いつもの瞬時加速とは使う量が違うため、その速度は爆発的に上昇するだろう。
鈴の牽制を見て、相手を観察する。

そして、その時が来た。

溜めていたエネルギーを開放し、さっきとは比べ物にならないほどの速度で接近。
そして、最大出力での零落白夜を振り下ろす。

「うおおおおおおおっ！！！」

一閃。
振り下ろされた刃は、無人機を一刀両断した。
無人機の脅威は、こうして去った。

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

クラス対抗戦と襲撃（後書き）

「一夏、頑張りましたね」

「格好良かったです！」

「無人機を一刀両断。　格好いいシュチュエーションだと思うんですよね、私は」

「あの一夏、とっても格好良かったです！　惚れ直しました！」

「目ぇキラッキラしてますよ、この子」

対抗戦事後

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「一夏、お疲れ様です」

「おう」

一夏はしっかり勝って戻ってきました。
強くなりましたね。

「織斑、凰、お前らは戻って休め。　アインツベルン、少し話がある。　ちょっと来い」

「わかりました」

あの無人機のことですね、きっと。

「話というのはあの機体についてだ」

「あれは束さんが作った機体のようです」

「やはりあいつだったのか……」

「ですが、あれは何者かによってクラッキングされたようで、操作が効かなくなっていたようです」

「あいつに対してクラッキングだと！？」

「私も信じられません。　束さんは馬鹿ですけど頭はいいですし、その束さんに対してクラッキングなんて真似ができる人なんてそうはいません。　私は心当たりがないわけではないんですが、それはありえないんですよ」

「その心当たりとやらをいってみろ」

「もしかしたら、英霊が関わっているのかもしれません」

「英霊……確か、アインツベルンに伝わる召喚術による呼び出された英雄の霊、だったか？」

「はい。　英霊には伝承を具現化した宝具と言うのがあります。存在するかは知りませんが、操ること特化した宝具なら、束さんでも手に負えない可能性があります。　ただし、英霊の召喚はアインツベルンにしかできないはずなんですが……」

英霊の召喚にはアインツベルンの血が必要です。
それに、召喚の儀式はアインツベルンだけの秘密。
例え流出したとしても、血がなければ召喚はできない。

「英霊か、本当にただのクラッキングだけか、どちらにせよ厄介だな……」

「英霊の場合は特にです。　伝承の人物の能力は、ただでさえ高いのに、宝具なんて持ち出されたらかなりやばいですよ」

「お前の見立てで、相手にできそうなのはいるか？」

「その英霊次第です。　相手によって違う宝具を持ち出してきます

から」

「相手となる英霊次第では、私も、お前でも負けると？」

「はい。　英霊たちの能力を使えば対抗できますが、絶対勝てるとは言い切れません」

「厄介だな……。　あーもういいぞ」

「それでは、失礼します」

私は礼をしてから千冬義姉さんと別れる。
少し、伝承について調べてみましょう。
もしそうならば最悪ですが、可能性のある人物がいるかもしれませんし。

「厄介なことにならなければいいのですが……」

英霊なんて出てきたら最悪です。
ただでさえ強いのに、宝具なんて使われたらどうなることか。
宝具は一つ一つが強力なため、並の実力では歯が立たない。
しかも、初見では真名がわからないため、どんな宝具を持っているかも予想ができない。
厄介以外の何者でもない。

＞そう言う君は私たちを使っているのだがね＜

（な、貴方たちは私の味方じゃないですか！）

＞まあそうなのだがね＜

＞シロウ、ウリアスフィールで遊ぶのは止めなさい＜

＞たまにはいいであろう？　私とて暇なのだよ＜

（すみません、家ならまだしも、ここでは実体化させると面倒ですので……）

ドイツの実家ではよく実体化させていたんですけど、ここではそんなことをすれば問題になってしまいます。
英霊を留めておくための制限があるとはいえ、英霊たちの不満が募ればそれは無意味となってしまう。

（そういえば、なぜ霊体化しないんですか？）

＞なんとなくだ＜

（それなら私を弄る意味ないですよね？！　霊体化すればいいじゃないですか！）

＞冗談だ。　別の理由がある＜

シロウ、貴方って言う人は！

＞ギルガメッシュはよく霊体化してどこかに行っていますが、私たちはもしもの時に備えて待機しているのです＜

ギルガメッシュ……。
貴方という人は……。

＞まったく、私までも常に待機させなくてもいいと思うのだが……＜
＞貴方の力はウリアスフィールがよく使うのですから、少しは我慢してください＜
（どちらかが交代で霊体化すればいいじゃないですか。　誰か二人残っていてくれれば、私は構いませんよ）
ディルムッドもいるんですから、最悪その三人で回せば常に二人は残りますから。
＞そういうことなら、早速私は霊体化してこよう＜
＞あ、シロウ！＜
シロウはもう霊体化してどこかに言ったようだった。
みんな霊体化して何をしているんでしょうか？
特にギルガメッシュは。
＞我（オレ）か？　散歩だが？＜
（あ、いたんですか）
＞ウリアよ、お前、我（オレ）のことをどう思っているのだ？＜
（よく霊体化してどこかにいっていると、さっきアルトリアから聞きました。　だから、今もどこかにいっているのかと）
＞……まあよい。　散歩でもして、余興になりそうなものがないか探しておるのだ＜

（御眼鏡に適ったものはあったんですか？）

＞この近辺にはなかなかないな＜

サーヴァントよりも一定以上に離れることはできないので、その範囲以上にはいれないのだ。

（では、近い内にどこか出かけましょう。　一時的にとはいえ、ギルガメッシュの御眼鏡に適うものがあるかもしれませんしね）

＞それはよいな。　必ずだぞ＜

（わかっています）

そうこう話しているうちに、部屋の近くまで戻ってきました。

「一夏、戻りましたよ」

「お帰り、ウリア」

一夏はベッドの上で寝っ転がっていました。

「千冬姉の話ってなんだったんだ？」

「秘密です。　機密なので、教えることはできません」

「ふーん、そっか。　じゃあいいや」

あっさり引いてくれるのはありがたいですね。

「ありがとな」

「なにがですか？」

「俺を信じてくれて」

「……当然じゃないですか。　私が一夏を信じなくてどうするんですか。　私は一夏の彼女なんですから」

「ウリア……」

「私は一夏を信じます。　だけど、危険なことは止めてくださいね。一夏が怪我するのは嫌ですから」

「大丈夫だ、とは言えないな……」

「一夏、それは誓ってくださいよ……」

「守るためなら自分を犠牲にくらいしてやるさ」

「一夏、守るために自分を犠牲にしないでください……。　一夏に死なれたら私は、私は……」

一夏に依存しすぎているのはわかりますが、私は一夏無しでは生きれない。
そんな気がして仕方がないんです。

「大丈夫だウリア……。　俺は死ぬつもりは毛頭ないから……」

一夏は私を抱きしめた。
自分の存在を感じさせるように、強く、ぎゅっと。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

休日、城にて（前書き）

ふかやんさんのアイディアを参考にさせていただきました！

休日、城にて

Ｓｉｄｅ～ウリア～

六月頭の日曜日。
私は今、日本にある家（城）に来ている。
一夏は友達の家にいるそうです。

「ウリア、一夏君とはどうかい？」

「一夏とですか？　楽しくやっていますが……」

「それならいい。　もしも彼がウリアを泣かせるようなことをしていたら……フフフフ……」

「駄目ですよ、あなた。　その程度じゃあ。　ウフフフフ……」

私の両親は過保護だ。
かなり重度の。
正直実の娘でもこれは引きます。

「だ、大丈夫ですから、どうか戻ってきてください」

「おっと、つい」

「お父様、お母様、もしも一夏に手を出したら、いくらお二人でも私は許しませんからね？」

一夏を亡き者にするのなら、いくらこの二人といえど、私は絶対に

許さない。
地獄の果てまで追って復讐に走るでしょう。
「わかっている。　ウリアに嫌われることを、私たちがするわけがないだろう」
「そうよ、ウリア。　私たちはウリアのことを大事に思っているのだから」
娘を思うのはいいのですが、限度というものがあってもいいのでは？
「あ、忘れていました。　私に用とは？」
「ああ、それか。　先日の無人機の襲撃についてだ」
「……なぜ知っているのでしょうか？　それは機密なのですが……」
「ウリアのＩＳ『サーヴァント』の中にいる英霊たちに定期的に連絡をさせるようにしているのだよ」
「……そういうことは最初から教えておいてくれませんか？　プライバシーの侵害ですよ？」
「冗談だよ」
「冗談でも止めてください」
「ウリアのプライベートは気になるけど、そんなことをした嫌われるからね。　していないよ」

「で、どのようにして？」
「私の召喚した英霊の仕業ですよ」
「お母様の？」
現アインツベルン家当主である母。
母が身近においている英霊は知りませんね。
「卑弥呼、来なさい」
「何ですか、マスター」
「卑弥呼って、あの卑弥呼ですか？」
「ええそうよ。　邪馬台国の女王の卑弥呼よ」
美人で、一般的な服を着ている。
とても卑弥呼には見えない。
「ああ、貴女がマスターの娘さんね？」
「あ、はい。　ウリアスフィールです」
「そう、貴女が。　マスターに良く似ているわね」
「よく言われます」
昔はそうでもなかったんですけどね。

「さて、卑弥呼の宝具によって知ったのよ」
「宝具、ですか？　一体どのような……」
「真名は『民衆導く鬼道の神具（八咫鏡）』よ。　能力は過去・現在・未来、知りたい情報を知ることのできる」
「情報蒐集に特化した宝具ですか」
「ええ。　でも、長時間の使用はできないし、未来の情報を見るのは時間がかかるの」
「魔力不足ですか？」
「そうよ。　八咫鏡は使っているだけで魔力を大量に消費するの。特に未来を見るときはね」
「なるほど、それで無人機のことを知っていたのですね」
「そういうこと」
「話を戻そうか。　その無人機、束ちゃんの作ったものなのだろう？」
「そのようです。　束さんからメールが届きましたから」
「その無人機はもともとＩＳ学園に向けて飛ばされていたんだ」
「え？」

束さん、貴女はなにをしているんですか？

「その途中、それは暴走した」

「それであれですか」

思い出すのは無人機の乱入と一夏の奮闘。

「暴走した瞬間を見たんだけど、あれ、クラッキングによる暴走じゃないわ」

「……ということはつまり……」

「そう。　宝具によるものだ」

「しかし、機械を暴走させるなんて、どんな……」

「暴走を始める少し前、笛の音色が聞こえていたんだ」

「笛の、音色？」

「おそらく、その宝具の持ち主は『ハーメルンの笛吹き男』こと、魔法使いマグスだろう」

ハーメルンの笛吹き男は、ハーメルンの人々の依頼でねずみ退治を行った。

笛の音でねずみを引き付け、残さず川に溺死させ、依頼を成功させた。

だが、人々は報酬を出し渋ったため、男の怒りを買い、住民が教会

にいる間に街の子供たちを連れ去った。
１３０人の少年少女は男の後ろについていき、洞窟の中に誘い入れられた。
洞窟には中から封印がされ、中に入った男も、子供たちも二度と戻ってこなかった。
一部、二人の子供が残された伝えられている。
まあ、『ハーメルンの笛吹き男』についてはこんなところかな。

「しかし、機械を音で操る芸当が可能なのでしょうか？」
「可能なのだろう。　それが英霊という存在であり、宝具という逸脱した代物なのだから」
「問題は、どのようにして英霊を召喚したのか、ということよ」
「アインツベルンから儀式についての情報が漏れたとは考えられない。　たとえアインツベルンから儀式についての情報が漏れているとしても、アインツベルンの血が必要になるからほぼ不可能だ」
召喚の儀式にはアインツベルンの血が必要になる。
情報漏れがあるのなら、すぐさま伝わるはず。
血が盗まれたとしても同様に伝わるはず。
なのに、そういった兆しは見られなかった。
「私の八咫鏡でも見れなかったわ。　靄がかかっているようで、その英霊と思しき正体、そしてその召喚者の姿は見れなかったの。
私の宝具の力を打ち消す宝具を持つのか、それとも対魔力がＡランクを超えているのか」

『Ａランクを超える』、つまり、Ａ＋ランク以上の英霊は効かないようです。

「相手の戦力は未知数で、対魔力Ａを超える英霊か、八咫鏡の力を遮断する宝具を持っているってことよ」

「厄介ですね……」

「卑弥呼の八咫鏡でも見れなかった以上、ウリアも警戒しておくように。　何かあったら私たちに教えてくれ」

「わかりました。　お父様たちも、何かわかれば教えてください」

「わかっているわ」

一応千冬義姉さんに伝えるだけ伝えておきましょうか。

「私たちからの話は以上だ。　ゆっくり休むなり、好きに過ごすといい」

「わかりました」

とりあえず、休みましょう。
私は自分の部屋へと向かう。
途中、外を見たりしていると、アルトリアとシロウがいい雰囲気だったり、クーとフェルグスでしたっけ？　が戦ってたり、イスカンダルとギルガメッシュがお酒を飲み交わしていたりと、みんな各々で何かしていた。

「やっぱり実体化すると生き生きしてますね」

そうこうしているうちに部屋に着いた。

「たまにはこういうのもいいですね」

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

休日、城にて（後書き）

ハーメルンの笛吹き男は私が考えてみたのですが、なにか指摘があればお願いします。

二人の転校生

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「ハヅキ社製のがいいかなぁ」

「え？　そう？　ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。　特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。　モノはいいけど、高いじゃん」

「やっぱりアインツベルン社製かな～」

「でも高いよね」

月曜日の朝、クラス中の女子生徒たちが手にカタログを持って談笑していました。

私は一夏と別の部屋になりました……。

うぅ……、なんで転校生なんて来るかな……。

「そういえば織斑君とアインツベルンさんのＩＳスーツってどこのなの？　二人とも見たことがない型だけど」

「やっぱりアインツベルンさんのはアインツベルン社製？」

「はい。　私のはアインツベルン社製のオリジナルのオーダーメイドですよ」

アインツベルン社はアインツベルンが経営している企業で、私はその企業代表でもあるんです。
ちなみに、アインツベルン社製の製品は国家代表クラスに人気だったりします。
性能はいいんですが、高いんですよ。

「へー、通りで見たことないはずだね」

「織斑君のは？」

「俺のは特注品だって。　男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。　えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いてる」

よく覚えていましたね。
感心しました。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。　あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすら説明したのは山田先生。
いつもとは違いますね。

＞さりげなく酷いことを言ったな＜

＞ですが、それも仕方がないかと＜

＞確かにな。　いつもは頼りないのだがな＜

（貴方たちも大概ですよ？）

＞そういえばウリアよ、先ほど見覚えのある奴を見たぞ＜

（見覚えのある？　誰ですか？）

＞銀髪で眼帯の小さい奴だった＜

あの子ですか。
さすがギルガメッシュ。
名前を覚えないとはさすがです。

（わかりました。　ありがとうございます）

あの子のことですから、このクラスになるでしょう。
なんせ、あの子は千冬義姉さんを異常なほどに尊敬していましたからね。
って、私が部屋を変えられた理由って、これですよね？

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

千冬義姉さんです。
私は英霊たちとの会話を中断して意識を切り替える。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。　訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。　各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。　忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。　それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

そこは構いましょうよ！

一夏だっているんですよ！？

「では山田先生、ホームルームを」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも２名です！」

「「「えええええええっ！？」」」

二人って、ばらしましょうよ。

あの子はこのクラスにくるとして、もう一人は誰でしょうか？

「失礼します」

「……」

え？

一人は私の予想通りのあの子でした。

もう一人を見て、クラスが静まり返った。

なぜなら、そのもう一人の子が、男の格好をしていたからです。

☆

「シャルル・デュノアです。　フランスからきました。　この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

「きゃ……」

「はい？」

あ、耳を塞いでおきましょう。

「「「きゃあああああ――――っ！」」」

皆さん、どこからそんな大きな声が出るんでしょうか？

「男子！　二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～！」

皆さん本当に元気ですね。

「あー、騒ぐな。　静かにしろ」
「み、皆さんお静かに。　まだ自己紹介が終わってませんから～！」
もう一人の転校生。
彼女は私の特訓の相手でもあった子です。
「……挨拶をしろラウラ」
「はい、教官」
やはり千冬義姉さんには素直ですね。
「ここではそう呼ぶな。　もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。　私のことは織斑先生と呼べ」
「了解しました」
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「……」
もう少しなにか言いましょうよ。
一夏よりも酷いですよ。
「あ、あの以上……ですか？」
「以上だ」
可愛そうに、山田先生。

あ、一夏と目が合いました。

「！　貴様が――――」

パシッ。

ラウラは右手を振り上げ、振り下ろす。
だが、それは一夏に防がれた。
ラウラは驚いていますね。
まさか防がれるとは思っていなかったのでしょう。

「何のつもりだ？」

「私は認めない。　貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」
今度は左手をを振り上げて、もう一度振り下ろそうとした。

「止めなさい、ラウラ」

「！　ウリアスフィール嬢！」

私の声に反応して動きを止めるラウラ。

「止めなさいと言っているの。　わからないの？」

「……わかりました」

ラウラは渋々といった感じで席に座る。

「ではＨＲを終わる。　各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集

合。　今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。　解散！」

とりあえず着替えましょう。

「おい織斑。　デュノアの面倒を見てやれ。　同じ男子だろう」

やっぱりあの子は一夏に任せられましたか。

＞ウリアスフィール、少しお話が＜

（どうしました、アルトリア？）

＞あのシャルル・デュノアという男ですが、私と同じ感じがします＜

（……と、いいますと？）

＞あの男、性別を偽っているのでは？＜

（つまり、あの人は男子ではなく女子だと？）

＞はい。　私も性別を偽っていたが故、そう感じるのです＜

アルトリアのフルネームは『アルトリア・ペンドラゴン』。

かの騎士王、アーサー王である。

性別を偽り、王として生きたが故にそう感じれたのでしょう。

（アルトリアが言うのですから、間違いないでしょう。　常にシャルル・デュノアを監視しておいてください）

＞……御意＜

（ハサン、一応ラウラも監視しておいてください）

＞……了解した＜

分裂するの早いですね。
このハサンの持つ宝具は『妄想幻像（ザバーニーヤ）』。
多重人格者であったハサンを、個々に分裂させることのできる宝具である。
諜報には持って来いですね。
シャルル・デュノアが一夏に近づいた理由はおそらく機体データの収集。
だが、なぜ彼女？がやっているのかが不明です。
お母様に調べてもらいましょうか？
それとも直接聞いちゃいましょうか？
ま、それは後にして、今はグラウンドに行きましょう。
叩かれるのはごめんですからね。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

二人の転校生（後書き）

シャル、さっそくばれた！
英霊なら気づいてもおかしくないですよね？

実習（前書き）

ふと気づけばお気に入り登録人数が１００人を突破してました。
こんな作品でも見てくれる人はいるんですね。

実習

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「では、本日から格闘戦及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

一夏と女子の疑いがあるシャルル・デュノアが到着し、なぜか鈴とセシリアが千冬義姉さんに叩かれていたが、今はラウラとシャルル・デュノアについてだ。

あ、鈴が一夏を蹴りました。

あとでお仕置きしませんとね！

「今日は戦闘を実演してもらおう。　ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。　―――凰！　オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

多分鈴のとばっちりです。

あきらめましょう。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。　いいから前に出ろ」

ぶつぶついいながらも前に出る二人。

千冬義姉さんが怖いんですね。

「お前ら、少しはやる気をださんか。　―――全力のウリアとやらせるぞ？」

「や、やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「ま、まあ、じ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

？　千冬義姉さんは何を言ったのでしょうか？
急にやる気になりましたが……。
しかも何かに怯えているような……。

「そ、それで、相手はどちらに？　わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが？」

「ふふん。　こっちのセリフ。　返り討ちよ」

「慌てるなバカども。　対戦相手は―――」

キィィィィン……。

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

一夏に向かって落ちていきます。
一夏はとっさに白式を展開して、その落下物を受け止めた。
ふう……、よかったです。

「山田先生、大丈夫ですか？」

む、あの落下物は山田先生だったんですか……。
教師ともあろう人が、ＩＳに乗って落下するとは……。

一夏に何かあったらどうするんですか！

「おいアインツベルン。　殺気を抑えろ。　周りの女子たちが怯えている」

「……仕方がありませんね」

あとで個人的に殺らせてもらえるように取り計らってもらいましょう。

「で、山田先生はいつまで私の一夏にくっついているつもりですか？　怒りますよ？」

「す、すみませんっ！」

謝りながら離れる山田先生。

始めからそうしていればいいんですよ、まったくもう。

「（ウリア、安心しろ。　ちゃんとやらせてやる）」

「（ありがとうございます、千冬義姉さん）」

千冬義姉さんとのアイコンタクト。

やっぱりわかってくれてますね。

「さて、さっさと始めるぞ」

「え？　あの二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。　今のお前たちなら直ぐに負ける」
負けるといわれたのがよほど悔しいのか、二人は瞳に闘志をたぎらせる。
単純ですね。
「では、はじめ！」
号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。
「手加減はしませんわ！」
「アタシも手加減は無し！」
「い、行きます！」
山田先生はさっきとは切り替わって目つきが違う。
なぜ最初からそうではないんですか……。
「さて、今の間に……そうだな。　ちょうどいい。　デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」
「あっ、はい」
「山田先生が使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。　第二世代最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。　現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七カ国

でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。　特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え（ルチロール・チェンジ）を両立しています。　装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多い事でも知られています」

さすがはデュノア社の人間です。
自社の機体だから、説明はお手の物ですね。

「ああ、いったんそこまでいい。　……終わるぞ」

山田先生の誘導により、鈴とセシリアがぶつかったところにグレネードを投擲。
その爆発で勝負が決した。
鈴とセシリアの負けだ。
その二人は醜い言い争いをしている。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。
以後は敬意を持って接するように。　ところで山田先生、もう一戦やれるか？」

「は、はい。　あまりダメージを受けなかったので大丈夫です」

「ということだ。　アインツベルン、出て来い」

「はい」

ふふふ、これで殺れますね……。

「アインツベルン、殺るのはいいが、やり過ぎないように」

「字が違いますぅ！」

「わかってます」

「無視ですかぁ？！」

山田先生が何か言っていますが気にしません。

「さて、山田先生、殺りましょう」

「だから字が違いますぅ！」

私は【英霊・エミヤシロウ】で展開する。

（やりますよ、シロウ）

＞了解した＜

「では、始め！」

私は《干将（かんしょう）・莫耶（ばくや）》を投影する。

山田先生はアサルトライフルで撃ってくるが、それは避け、剣で弾く。

「一気に仕留めます！」

両手の剣を投擲し、さらに投影し投擲の繰り返しで五組の夫婦剣が飛び交う。

私はさらに投影して接近する。

飛び交う夫婦剣は互いに引き付けあい、交差するように山田先生を切りつける。
山田先生はそれを避け、打ち落とすが、隙を作るのが狙い。
打ち落とされた剣は霧散するから爆破しても問題ない。
私は瞬時加速で急接近して斬りつけ、通り過ぎてから後ろへ投擲する。

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）！」

山田先生の周りを浮遊していた三組の剣と、先ほど投げた一組の剣が爆発する。
計四組、八本の剣による爆破に巻き込まれた山田先生は落下した。

「まあ、これがアインツベルンの企業代表の実力だ。　では専用機持ちはアインツベルン、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。　アインツベルンはボーデヴィッヒとペアでやるように。　それでは八人グループになって実習を行う。　各グループリーダーは専用機持ちがやること。　いいな？　では分かれろ」

私はラウラとですか。

「ラウラ、やりますよ」

「了解しました」

ラウラって私にも従順なんですよね。
って、一夏とシャルル・デュノアの周りに女子たちが集まっていますね。
怒られますよ？

「この馬鹿者どもが……。　出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。　次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声ですね。
あっという間にグループが出来上がりました。
周りはぼそぼそと話しているが、私たちの班は沈黙している。
ラウラが原因ですね、きっと。

「ええと、いいですかーみなさん。　これから訓練機を一班一体取りに来てください。　数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。　好きなほうを班で決めてくださいね。　あ、早い者勝ちですよー」

山田先生はいつもよりもしっかりしている。
なぜでしょうか？

「……さて、リヴァイヴと打鉄、どちらがいいですか？」

「えっと、リヴァイヴで」

「それでいいですか？」

「あ、はい」

「では、取りに行きますよ。　早い者勝ちですからね。　ラウラも行きますよ」

「……了解しました」

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。　全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切ってあります。　とりあえず午前中は動かすところまでやってみてくださいね』

さて、しっかりやらないと。
時間内に終わらせましょう。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

昼食（前書き）

若干一夏が壊れた？

昼食

Ｓｉｄｅ～ウリア～

「では、午前の授業はここまでだ。　午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班ごとに集合すること。　専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。　では解散！」

私たちは余裕を持って行動できました。
これもラウラ効果ですかね。
ずっとムスッとしている所為か、みんな素早く行動してくれましたよ。
一夏はギリギリだったようで、肩で息をしていました。

「ラウラ、行きますよ」

「はい」

着替えてお昼を食べましょう。
一夏たちはハサンに任せるとして、今はラウラと話をしなければなりませんね。
一夏を敵視しすぎていますから、少しずつ変えていきませんと。

「ウリアスフィール嬢」

「何ですか？」

「貴女とあの男……織斑一夏とはどのような関係なのでしょうか？」

「一夏との関係ですか？　恋人ですが」

「！　なぜあのような男と！」

「ラウラ、あなたが千冬義姉さんを尊敬しているのは知っています。モンド・グロッソ二連覇できなかったのは確かに一夏が攫われた所為です。　ですが、一夏はそのことをずっと気にしています。一夏は千冬義姉さんに迷惑を掛けるのが嫌で、バイトの合間を縫っては鍛えていたようです」

少しでも千冬義姉さんの負担が減るようにと、頑張っていたんです。

「それに、ラウラが千冬義姉さんと会えたのはそれがあったからです」

一夏の誘拐がどのような真相であっても、それがあったからこそラウラは千冬義姉さんに出会えたのだ。

「しかし！」

「ラウラ、一夏だけを目の敵にしてはいけませんよ。　ラウラが言っていることは、一夏だけでなく千冬義姉さんをも否定しているんです」

「ウリアスフィール嬢、それはどういうことですか？」

「ラウラ、これはあくまで推測ですが、千冬義姉さんがあそこまで強いのは一夏がいたからです」

「！」

「一夏と千冬義姉さんは幼い頃に両親から捨てられているんです。
幼いながらも千冬義姉さんは一夏を守るために努力していたんです。　一夏を守れるのは自分だけだと、ただ一人の家族としてとても大事にしていたんです」

ちなみに、これは前に千冬義姉さんに聞いたことも混ぜた独自解釈です。

「ですから、今の千冬義姉さんがいるのは一夏がいたからなんですよ。　ラウラが一夏のことを認めないのはラウラの自由ですが、すべて一夏が悪いとは思わないでください」

「……わかりました」

わかってくれてよかったです。
あとは一夏とラウラがどのようになるかですね。

「では、お昼ご飯を食べに行きますよ」

私はラウラの手を取って歩き出す。

「歩けます！　自分で歩けますから手を放してください！」

「そうですか。　混む前に行きますよ」

きっとシャルル・デュノア目当てで混むはずですからね。
急がないとお昼が食べれません。

Ｓｉｄｅ～ウリア～ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ～一夏～

ウリアはあのラウラって奴と一緒に食べるらしく、俺たちは屋上で昼食を取っていた。
にしても、ウリアとボーデヴィッヒが知り合いだとは思わなかった。

「一夏とアインツベルンさんってどういう関係なの？　実習のときの様子だと、付き合っているの？」

「ああそうだぜ。　ウリアと俺は付き合っているぞ。　多分、俺に向かって落ちてきた山田先生に怒っていたのだろう」

「そ、そうなんだ」

シャルルは少し引いているが、ウリアの戦いでも思い出したのだろう。
多量の剣に、襲われ、しかもそれが一気に爆発するとなると結構怖いしな。
剣に囲まれると、爆発もあるから無闇に動けないし、爆発の威力にもよるけど、逃げ場無いからな。

「怒ると怖いけど、いつもは優しいぞ」

「へえ、そうなんだ。　だけどあまり惚気ないでね」

「お、おう、悪い」

俺としては惚気ている気なんて無いんだけどな。
おいこら、今バカップルって言った奴出て来い。
斬ってやるから。

「にしても、男同士仲良くしようぜ。　色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。　わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。　ただし、ＩＳ以外で」

勉強はしているんだが、まだ教えれる自信は無い。
そういえば、シャルルって凄い遠慮深いんだよな。
シャルル争奪戦とばかりに、一年一組には大量の女子たちが押し寄せてきたんだが、このブロンド貴公子、丁寧に丁寧を二乗したような対応をしていた。
そんなシャルルに、女子たちは恥ずかしくなったのか引き上げていったんだ。
なんせ、その時に言ったセリフが

『僕のようなもののために咲き誇る花の一時を奪うことは出来ません。　こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうなのですから』

これだぜ？
もうなんというか凄いの一言だ。
俺とウリアの関係が公になる前は俺も女子たちにアピールされまくっていたのだが、正直面倒でしかなかった。
俺はシャルルみたいに引き上げさせることなんてできなかったんだからな。
ただ、ウリアが時々殺気を出していてくれたおかげで多少は楽だったんだ。
やっぱりウリアは俺のオアシスだ……！

「ありがとう。　一夏って優しいね」
あの笑顔、本当に男かと思うほど綺麗だったぞ。
これが男の娘って奴か！
ゾクッ！
今一瞬物凄い寒気が……。
ウリア、これは浮気なんかじゃないからな！
俺はウリア一筋だからな！
「どうしたの、一夏？」
あ、なんかシャルルに感づかれた。
「いや、なんでもない。　ただ自分の気持ちを改めて実感しただけだ」
「？　変な一夏」
「ま、これからルームメイトになるだろうから、よろしくな」
「うん、よろしく」
シャルルがくるからウリアと別の部屋になったんだな、きっと。
男が増えたのはうれしいが、ウリアと別の部屋になるのは嫌だったな。
ウリアは新しいルームメイトは誰なんだろうか？
知り合いみたいだったボーデヴィッヒとかな？

ボーデヴィッヒはウリアに従っていたけど、何かされないか心配だな。
俺をいきなり叩いてくる奴だし、もしかしたら俺との関係を知ってウリアにも何かしでかさないかが心配だ。
本当に心配だ。

「一夏、本当に大丈夫？　さっきから変だよ？」

「いや、俺の考えすぎだな、うん。　そうだ、きっとそうだ」

「……何考えてるかなんとなくわかった気がするよ……」

なにを呆れているかは、まあ今回は目を瞑ろう。
今度ウリアと話さなければ！

Ｓｉｄｅ～一夏～ｏｕｔ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2508z/

IS 銀の姫とサーヴァント

2011年12月28日20時56分発行